

椿市廃寺

行橋市文化財調査報告書

1980

行橋市教育委員会

椿市廃寺

行橋市文化財調査報告書

1980

行橋市教育委員会

序

椿市廃寺は、これまで百済系古瓦が出土することや、四天王寺式伽藍配置が推定されることなどから研究者間で注目されてきた遺跡であります。しかしながら、これまで発掘調査も行なわれたこともなく現在にいたっております。行橋市教育委員会では、この遺跡の重要性を考え県教育委員会文化課の指導のもとに昭和52年度から3ヶ年計画で国（県）の補助事業として発掘調査を実施しました。この報告書は、その成果をまとめたものであります。今後この報告書が広く活用されることを期待するしだいであります。

発掘調査、報告書刊行にあたって始終ご尽力いただきました県教育委員会文化課、九州歴史資料館の方々に心からお礼申し上げますとともに発掘調査にご協力いただきました地元関係者、椿市校区区長会、願光寺住職ほか関係者各位に深甚なる謝意を表します。

昭和55年3月31日

行橋市教育委員会

教育長 木下 椿 一

例 言

1. 本書は行橋市教育委員会が国、県の補助金を受けて実施した椿市廃寺の発掘調査報告書である。
2. 調査は行橋市教育委員会が事業主体となり、調査の実施にあたっては九州歴史資料館調査課の石松好雄、高橋章が担当した。
3. 本書の執筆は下記のとおりである。
I, II, III, IV-1, 3, V-1・3, VI-石松, IV-2・4・5-高橋, V-2-森田,
4. 地形図作成にあたっては日高正幸氏の協力を得た。
5. 本書作成にあたって遺構図は高橋が製図を行い、出土遺物の整理実測・製図は石松、高橋が行ったが一部森田勉氏の協力を得た。遺構・遺物の写真は石丸洋が撮影した。
6. 本書の編集は石松、高橋が行った。

目 次

序

I	発掘調査にいたる経過	1
II	遺跡の位置と環境	4
III	調査の概要	
	1. 第1次調査	5
	2. 第2次調査	5
	3. 第3次調査	7
IV	遺 構	
	1. 講 堂 跡	8
	2. 金 堂 跡	9
	3. 塔 跡	9
	4. 講堂東地区	11
	5. 講堂北地区	12
V	遺 物	
	1. 瓦 類	14
	2. 土 器 類	20
	3. その他の遺物	23
VI	まとめ	24

図 版 目 次

- 図版1 椿市廃寺周辺航空写真
- 図版2 講堂基壇南辺 上(南から)下(東から)
- 図版3 上、講堂基壇北辺(北から)
下、講堂基壇東辺(南から)

- 図版4 講堂礎石
- 図版5 (上) 金堂基壇北辺 (北から)
(下) 金堂南辺トレンチ (北から)
- 図版6 (上) 溝SD 010 (南から)
(下) 溝SD 011 (西から)
- 図版7 (上) 講堂東地区全景 (南から)
(下) 建物SB 002, 003, 004 (西から)
- 図版8 SB 006柱根
- 図版9 (上) Oトレンチ全景 (西から)
(下) 建物SB 009 (西から)
- 図版10 (上) 建物SB 009 (西から)
(下) SX 013炉状遺構 (北から)
- 図版11 (上) Mトレンチ全景 (西から)
SB 021建物 (北から)
- 図版12 (上) Nトレンチ全景 (東から)
(下) SX 015 (西から)
- 図版13 (上) 塔心礎 (東から)
(下) 願光寺境内所在の礎石 (東から)
- 図版14 願光寺境内所在の礎石 (南から)
- 図版15 軒丸瓦
- 図版16 軒平瓦
- 図版17 丸瓦・平瓦
- 図版18 平瓦
- 図版19 鷗尾
- 図版20 出土土師器・須恵器・銅鈴、
- 図版21 銅銭

挿 図 目 次

第1図	椿市廃寺周辺遺跡地名表	2
第2図	トレンチ配置図	6
第3図	講堂(SB 001) 基壇南辺遺構実測図	8
第4図	講堂(SB 001) 基壇北辺遺構実測図・土層図	9
第5図	金堂(SB 005) 基壇北辺遺構実測図	9
第6図	塔心礎実測図	10
第7図	塔跡遺構実測図、土層図	10
第8図	講堂跡東地区遺構実測図	折込み
第9図	SB 008 実測図	11
第10図	SX 013 実測図	12
第11図	遺構配置図	折込み
第12図	SB 012 実測図	13
第13図	SX 015 実測図	13
第14図	軒丸瓦拓影・実測図	14
第15図	軒平瓦拓影・実測図	16
第16図	丸瓦・平瓦拓影・実測図	17
第17図	叩文集成図(拓影) $\frac{1}{2}$	18
第18図	叩文集成図(写真) $\frac{1}{2}$	19
第19図	平瓦叩文拓影	20
第20図	鷗尾拓影・実測図	折込み
第21図	土器実測図	21
第22図	SX 015 出土銅錢拓影($\frac{2}{3}$)	22
第23図	銅鈴実測図	23
第24図	講堂復原図	25

表 目 次

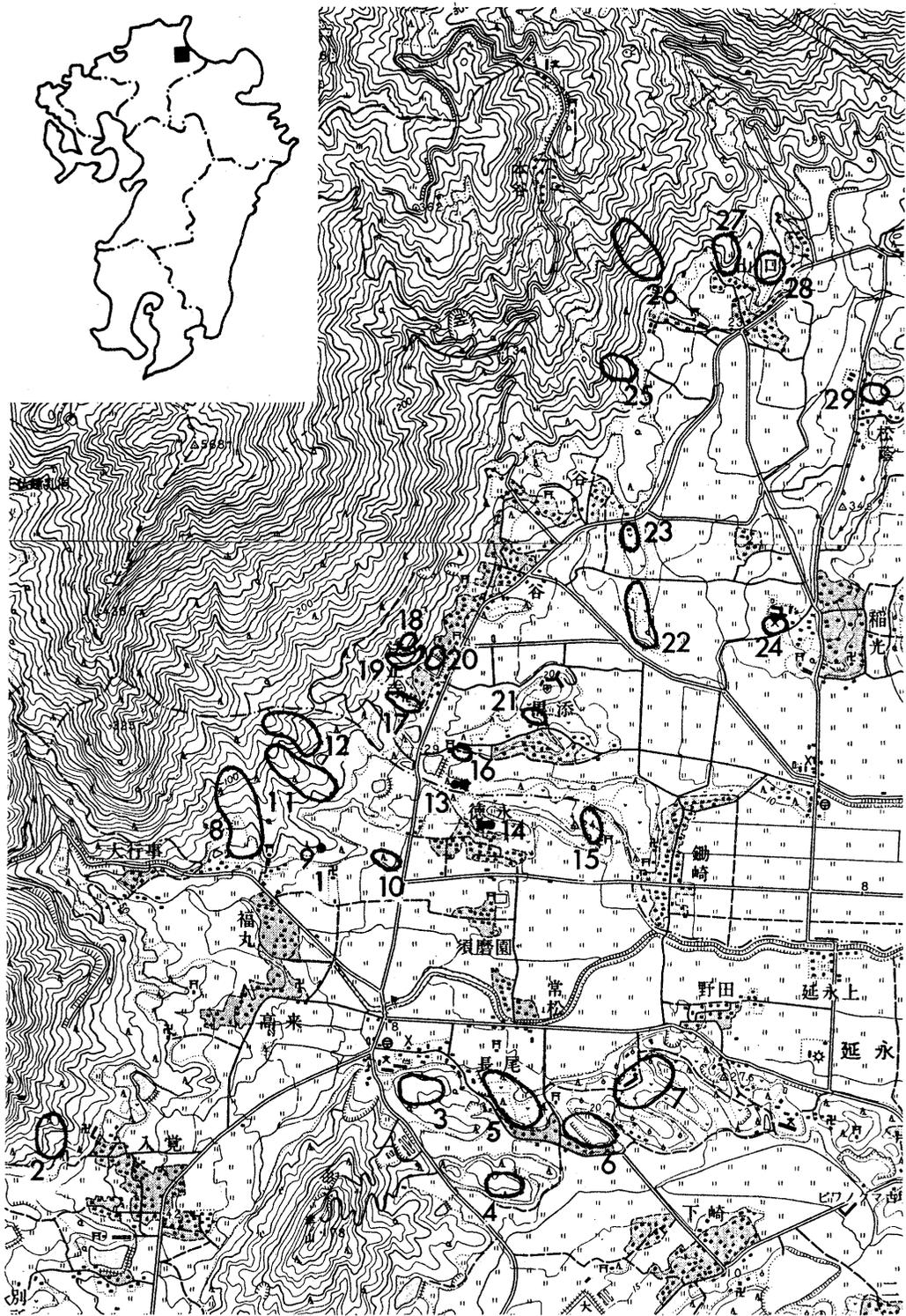
第 1 表	椿市廃寺周辺遺跡地名表	3
第 2 表	椿市廃寺発掘調査一覧表	5
第 3 表	S X015出土銅銭分類表	22

I. 発掘調査に至るまでの経過

椿市廃寺は行橋市大字福丸字上長町（旧椿市村）にあり、現在旧伽藍の中心部には天台宗の願光寺がある。この願光寺については、『大宰管内志』に「〔舊記〕に京都郡黒田郷福丸村、内有古刹號叡山願光寺僧行基經歷諸國之時草創當寺云今時所安置之藥師佛乃行基之刻也當寺往昔有七堂伽藍罹天正之兵火悉為灰燼其礎今猶在田間」とあり」と記しており、早くから、その遺跡の存在は知られていたものと思われる。現在、山門の付近には塔心礎のほか多数の礎石が寄せ集められており、また庫裡の部分には原位置を保っている礎石が4個確認されている。この願光寺を中心とする一帯からは、これまでに百済系の単弁八弁蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦が採集されていたが、昭和27年には新に新羅系の文様を有する軒平瓦が発見されている。その後昭和31年には小田富士雄氏らによって遺跡の測量調査が行われている。この測量結果によると、現在礎石が残っている庫裡の位置は講堂跡に相当すると考えられ、その南方約130尺の地点に塔心礎があったということから四天王寺式伽藍配置が想定されている。また寺域については少くとも一町半四方と推定されている。現在この付近は願光寺関係の建物のほかには民家が一軒あるのみで周囲はすべて水田となっている。

今回の発掘調査は昭和48年に行った重要遺跡確認調査に基づいて遺跡の保存のための資料を得ることを目的としたものである。行橋市教育委員会が事業主体となり昭和52年度から3ヶ年計画で実施したもので実際の発掘調査は九州歴史資料館が担当した。調査関係者は下記のとおりである。

調査指導委員	九州芸術工科大学教授	沢村 仁
	北九州市立歴史博物館主幹	小田富士雄
	行橋市文化財調査員	定村 責二
	〃	(故)原口 信行
福岡県教育委員会	文化課長	藤井 功
	文化課係長	宮小路賀宏
九州歴史資料館	調査課技術主査	石松 好雄
	〃 主任技師	高橋 章
	学芸一課主任技師	石丸 洋
行橋市教育委員会	教育長	木下 椿一
	社会教育課長	山中 募
	社会教育課主事	南谷 稔
	〃	塚本 弘志



第1図 樺市廃寺周辺遺跡分布図 (1/25,000)

番号	遺 跡 名	所 在 地	時 代	福岡県分布地図
1	椿 市 廃 寺	行橋市大字福丸字上長町	白鳳時代	140087
2	安 楽 寺 古 墳 群	” 大字入覚	古墳時代	140101・140102
3	峠 遺 跡	” 大字長尾字峠	弥生時代	140116
4	花 熊 遺 跡	” ”	”	140118
5	長 尾 立 花 遺 跡	” ” ” 字立花	”	140117
6	長 尾 楠 木 横 穴	” ”	古墳時代	140119
7	長 尾 野 田 遺 跡	” ” ”	弥生時代	140120
8	福 丸 古 墳 群	” 大字福丸	古墳時代	140037・140085
9	願 光 寺 裏 山 古 墳	” ”	”	140086
10	古 金 尾 遺 跡	” 大字徳永字古金尾	弥生時代	140089
11	野 口 古 墳 群	” ”	古墳時代	140013・140035
12	丸 尾 古 墳 群	” ”	”	140001・140012
13	黒添メウト塚古墳	京都郡菟田町大字黒添	”	900134
14	徳 永 丸 山 古 墳	行橋市大字徳永字屋敷	”	140090
15	宮 山 遺 跡	” ” 字宮山	”	140093
16	黒 添 神 社 遺 跡	京都郡菟田町大字黒添	弥生時代	900135
17	法正寺入古墳群群	” 大字法正寺	古墳時代	900138
18	シ シ 穴 古 墳	” ”	”	900150
19	奥 の 谷 古 墳 群	” ”	”	900145・900148
20	ミ ト ノ 首 古 墳 群	” ”	”	900142・900143
21	黒 添 遺 跡	” 大字黒添	”	900133
22	神 後 東 古 墳 群	” 大字谷		900126・900130
23	神 後 東 石 棺 群	” ”		900125
24	白 川 小 学 校 遺 跡	” 大字稲光	弥生時代	900131
25	山 口 南 古 墳 群	” 大字山口	古墳時代	900121・900123
26	山 口 古 墳 群	” ”	”	900103・900119
27	山口田村宅裏古墳群	” ”	”	900098・900101
28	山口上方古墳群	” ”	”	900097
29	松 蔭 箱 式 石 棺 群	” ”	”	900095

第1表 椿市廃寺周辺遺跡地名表

Ⅱ．位置と環境

椿市廃寺は行橋市の北西部、大字福丸字上長町にあり、旧京都郡椿市村に属する。この地域は祓川、今川、長狭川の三本の河川によって形成される京都平野の北西部にあたり、南北から迫る山塊の間を長狭川に合流する小波瀬川が東流するが、遺跡は、この小波瀬川に沿って開けた狭長な平野の最奥部に位置している。

この京都平野を中心とした周囲の山麓や丘陵上には弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多数分布しているが、最近調査が行われたものとして竹並遺跡や前田山遺跡などがある。歴史時代の遺跡としては、この地域には、いくつかの寺院跡があるが、なかでも椿市廃寺は時期的にもっともさかのぼるもので7世紀後半代の建立になるものと思われる。奈良時代にはいと豊前国分寺をはじめとして上坂廃寺、木山廃寺などがある。

豊前国分寺は京都平野の南部、京都郡豊津町にあり、現在県指定の三重塔がある。考古学的調査による報告はいくつかあるが、伽藍配置は不明で、昭和49年住宅建設にともない発掘調査が実施されたが顕著な遺構は検出されていない。この国分寺の東方 350m の所には徳政瓦窯^{註②}がある。

上坂廃寺は、この豊前国分寺の南約 1.5kmの豊津町上坂の水田に塔心礎が残っている。ここから採集される瓦は大宰府系の扁行唐草文軒平瓦があり、国分寺とほぼ同時期の寺院と考えられる。

木山廃寺は今川の中流、京都郡犀川町にあるが、現在は半分に割られた塔心礎が塞神塔として木山部落に残っているのみである。昭和49年圃場整備事業にともなって発掘調査が行われたが遺構は検出されていない。ここから採集される瓦は単弁八弁蓮華文軒丸瓦のほか大宰府系の扁行唐草文軒平瓦^{註③}などがあり奈良時代の寺院跡と考えられる。

この他勝山町大字松田には菩提廃寺がある。京都平野から田川方面へ抜ける仲哀峠の山麓にあり、塔の礎石と他の建物の礎石が原位置に残っている。地形的な制約から、その伽藍配置は山岳寺院のごとき配置をなしている。ここから採集される瓦は変形忍冬唐草文や単弁十三弁蓮華文軒丸瓦などで、文様の形態から奈良末から平安初期の頃の寺院跡と考えられる。

さて、このような環境の中にある椿市廃寺は西から東へ、ゆるく傾斜する緩傾斜の地形上にあり、現在伽藍中心部には願光寺の建物がある。また遺跡の背後は比高約20～25mほどの丘陵が東西にのびており、ここには多数の後期古墳が分布している。

註① 竹並遺跡調査会『竹並遺跡』1979

註② 豊津町教育委員会『豊前国分寺』豊津町文化財調査報告書 第1集 1975

註③ 犀川町教育委員会『木山廃寺跡』1975

Ⅲ. 調査の概要

今回の発掘調査は遺跡の保存のための資料を得ることを目的としたものであり、したがって調査内容も各遺構の残存状況の把握および寺域の確認に重点をおいた。調査にあたっては伽藍中心部と推定される地域は現願光寺の庫裡、本堂や畑などがあるためトレンチ設定についてはかなりの制約を受けた。このため各遺構について十分に追求し得なかつた点がある。調査は、まず礎石が確認されている講堂跡から着手し順次トレンチを設定して行った。トレンチ番号については設定順にA、B、C……とアルファベットで標示することとした。なお講堂跡、金堂跡についてはトレンチが小規模なものとなったため講堂跡をC、金堂跡をHとし、それに数字による枝番号を付して標示した。各次数毎の調査期間、発掘面積は下記の表のとおりである。

次数	調査面積	調査期間	調査対象
1	270㎡	1977. 11. 13~12. 6	講堂跡、塔跡、回廊跡
2	360㎡	1978. 11. 21~12. 20	金堂跡、中門跡、回廊跡
3	650㎡	1979. 11. 12~12. 13	南門跡、回廊跡、講堂後背地

第2表 椿市廃寺発掘調査一覧表

第1次調査

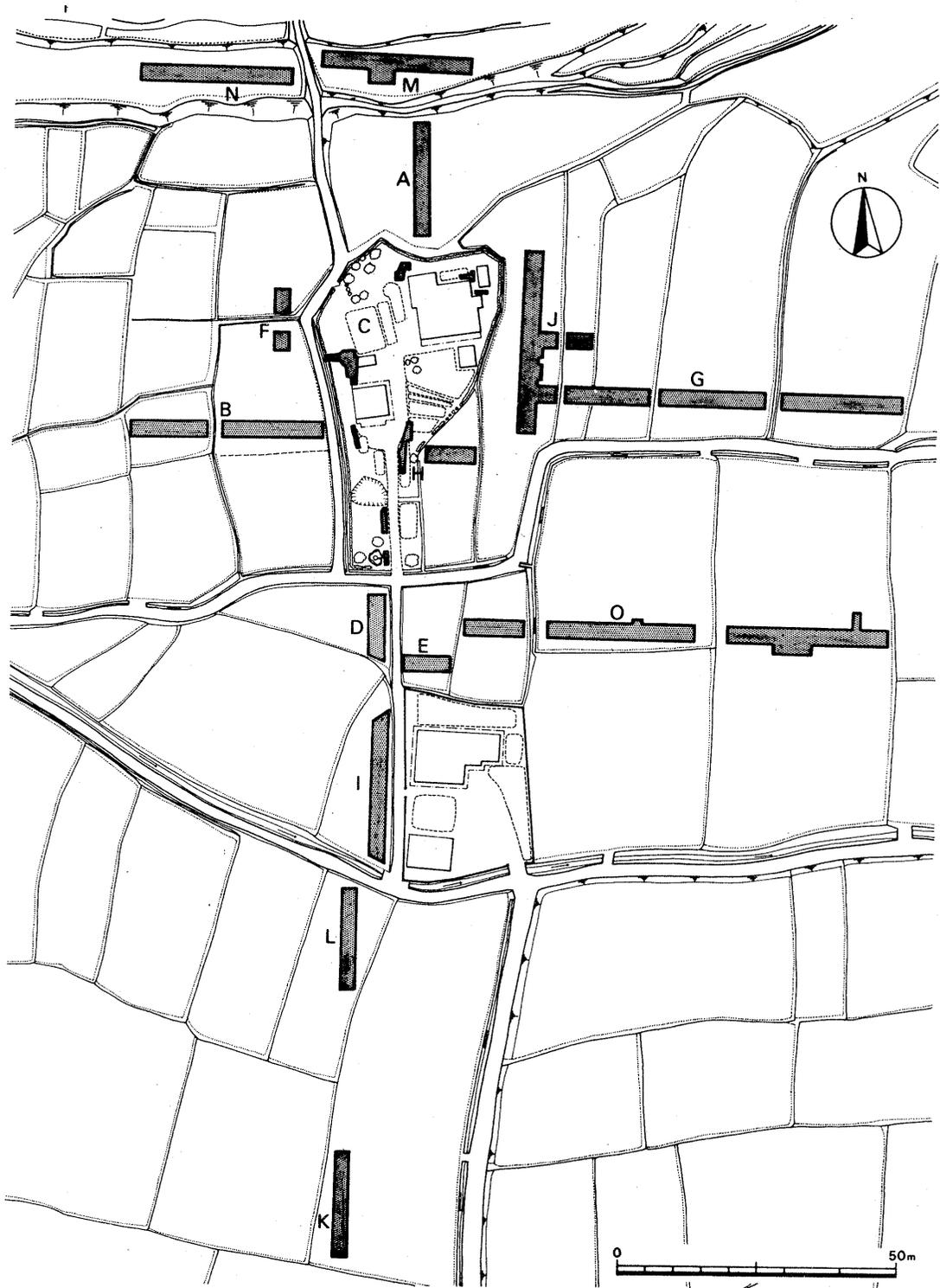
第1次調査では講堂跡、塔跡、西側回廊跡について調査を行った。願光寺の庫裡付近には、これまでに原位置を保っていると思われる4個の礎石が確認されており、講堂跡と推定されている。初年度は、この遺構を明らかにするとともに、それにもとずいて基準線を設定することとした。調査は既存の建物などのため制約を受けたが基壇の北端および南端を確認することができたとともに、あらたに2個の礎石を検出した。この結果、講堂基壇および建物の規模を明らかにすることができた。

次に塔跡については現在参道の西脇に心礎があり、元は現在の位置から約20mほど南へ寄った所にあったということであり、これをもとにトレンチD、Eを設定した。調査の結果、Dトレンチにおいて東西溝を、Eトレンチにおいて南北溝を検出した。この二条の溝は雨落溝としては幅が広すぎるが、埋土中には軒先瓦等を含んでいる点などから塔に関する溝と判断した。

回廊については講堂背後および西側にA、B、Fのトレンチを設定した。調査の結果、回廊に関する遺構は何ら検出されなかつた。ただAおよびFトレンチの状況からみると、講堂の背後は大きな溝状の落ち込みになっており膨大な量の瓦が堆積していることが判明した。

第2次調査

第2次調査では金堂跡、中門跡、東側回廊跡について調査を行った。まず金堂跡については講堂跡の南約20mほどの参道東脇に礎石が1個残っており、金堂の礎石と考えられていた。こ



第2図 トレンチ配置図

の礎石を手懸りにトレンチを設定し調査したところ、礎石下には黒色土をかんでおり完全に動いていることが確認された。また、この礎石から約3m北へ寄ったところで東西方向に並ぶ人頭大の石を検出した。この石列も原位置を保っていなかったが、これを境に北側は一面瓦敷きになっている点から、ほぼ、この石列付近が基壇の北端にあたるものと判断された。しかしながら他のトレンチでは何ら遺構は検出されず、したがって金堂については、おおよその位置を推定できたにとどまり、規模等については明らかにし得なかった。

次に中門跡については塔跡の南側にIトレンチを設定して調査を行った。この地点は塔跡よりも約1mほど低くなっており、東西方向に農業用水路が通っている。調査の結果、この中門推定地付近一帯は表土下は砂礫層となっており遺構は残っていないことが確認された。

回廊跡については第1次調査にひきつづき講堂東側について調査を行った。この地域は土地所有者の話によると、かつて耕地整理を行った際、南北方向の溝跡らしきものがあったとのことであり、これは寺域を画する遺構の可能性もあり、これが確認のためもあり東西方向に約70mのGトレンチおよび南北にJトレンチを設定した。しかしながらGトレンチ東半部においては遺構はまったく検出されず、土地所有者の談話による溝状のものも検出されなかった。耕地整理の際削平されてしまったものと考えられる。

次にJトレンチおよびGトレンチ西側では柱穴および多数のピットを検出した。特にJトレンチの東側壁際で検出した柱穴3個は柱間寸法 2.1m（7尺）で、いずれも径20cm程度の柱根が残っていた。掘立柱建物ないし南北方向の柵列などの可能性が考えられたが、調査は、すでに終了段階に入っていたため、遺構の性格追求については次年度に行うこととした。この他第1次調査で明らかにし得なかった講堂基壇の東端を確認するため再度調査を行ったところ、かろうじて地覆石2個を確認することができた。

第3次調査

第3次調査は第2次調査で講堂東側において検出した掘立柱遺構の求明および寺域確認に調査の重点をおいた。このためJトレンチを拡張するとともにK、L、M、N、Oのトレンチを設定し調査を行った。

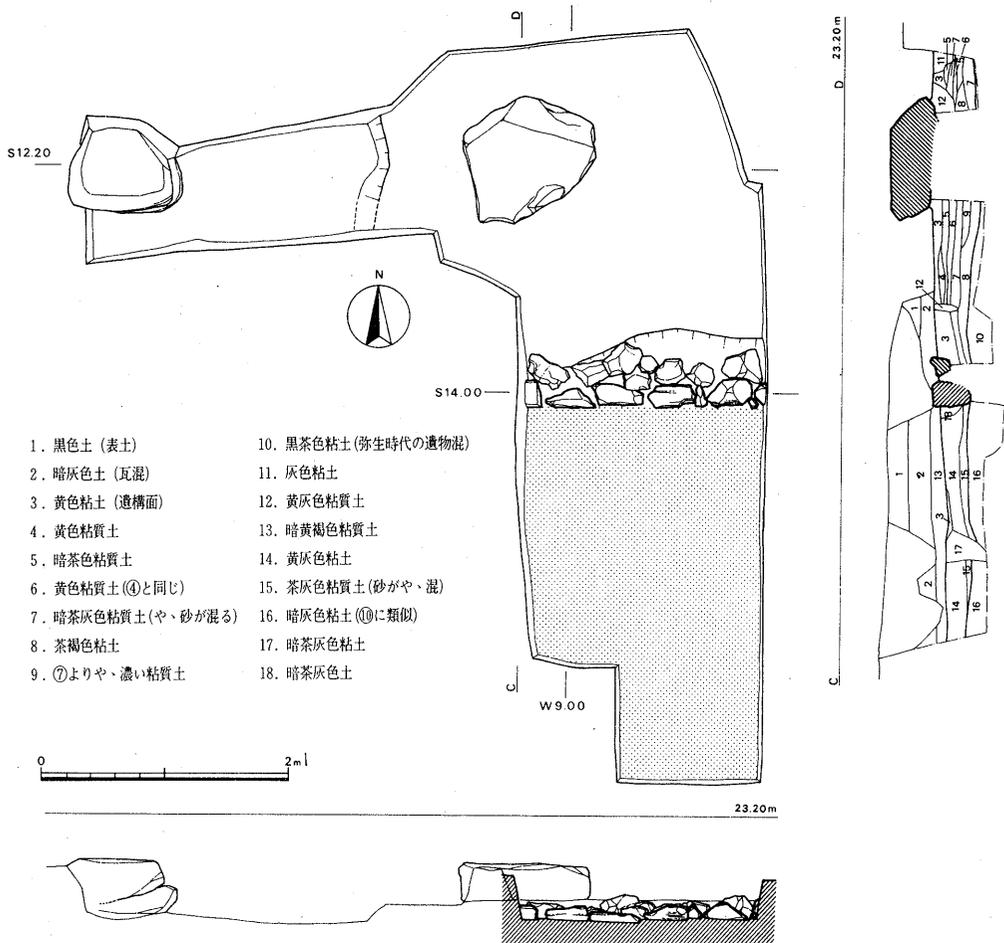
まずJトレンチでは第2次調査検出の3個の柱穴は南と北へはのびていないことが確認された。したがって、この3個の柱穴は掘立柱建物であることが明らかとなった。また、この他に掘立柱建物3棟があらたに判明した。寺域確認については今回設定したいずれのトレンチにおいても遺構は検出することができなかった。ただO、Mトレンチにおいて小規模な掘立柱建物を検出したが寺院跡に関係するものかどうかについては明らかではない。この他Nトレンチにおいて銅銭を埋納した中世の土壇一基を検出した。

IV. 遺 構

本廃寺の発掘調査は3次にわたっており、推定寺域内の各所を調査している。また既存の建物などによる制約から同一遺構を異なる回数で調査したところもある。このため遺構の記述については便宜上各遺構毎に一括して行うことにする。

1. 講堂跡

講堂跡については、これまでに4個の礎石が確認されていたが、今回の調査によって、あらたに2個の礎石を検出した。また基壇の東、南、北辺において玉石列を検出し、これによって講堂の位置と規模を知ることができた。基壇は花崗岩の玉石積みで、北辺部が最も良く残って



第3図 講堂(S B 001)基壇南辺遺構実測図

いる。人頭大の石を二列に敷きならべ、そのほぼ中央に玉石を積み上げている。基壇高は各礎石に若干の不同沈下がありレベルは一定していないが約 1.5尺程度と考えられる。基壇規模は南辺と北辺の玉石列外面間で約18m (60尺)である。東西は西辺部が確認できていないが東辺の玉石列を西へ折りかえすと26.1m (88尺)となる。

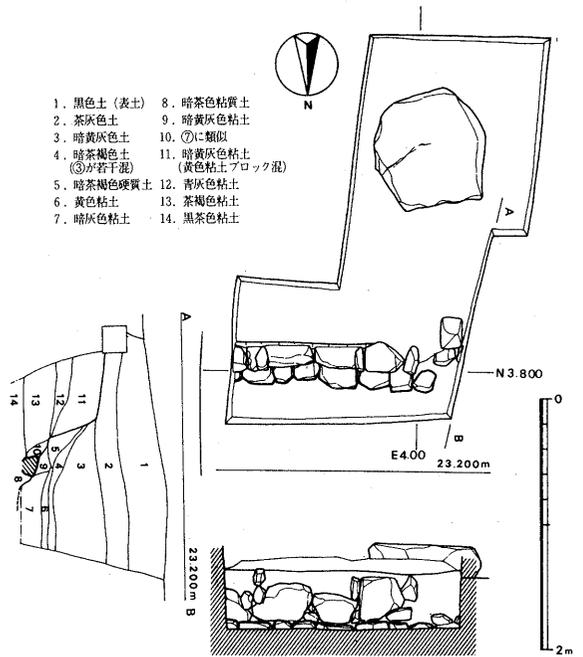
建物規模は7間×4間で桁行は11尺等間梁行は身舎2間が12.5尺、両脇間は11.5尺である。また基壇南辺玉石列より南側は瓦敷きになっており、状況からみて人為的に敷いたものと考えられる。

2. 金堂跡

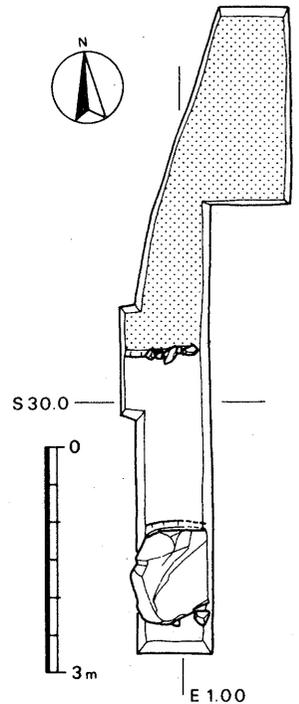
参道東脇に礎石が一個埋っており、金堂のものとして推定されている。調査の結果、この礎石は動いていることが明らかとなり、建物の規模を把握することは困難となった。この礎石の北側において東西方向の玉石列を検出した。直径20cm程度の花崗岩であるが、この玉石列も原位置を保っていないことが確認された。しかしながら、この石列を境に北側は一面に瓦敷きになっており講堂基壇の南側と同様人為的に敷かれたものと考えられる。この点からみると、この東西方向に列ぶ石はそれほど大きく移動しているとは考えられず、ほぼ、この石列付近が金堂基壇の北端を示しているものと考えてさしつかえないであろう。このように考えた時、講堂基壇南辺玉石列との距離は約15.2m (50尺)である。

3. 塔跡

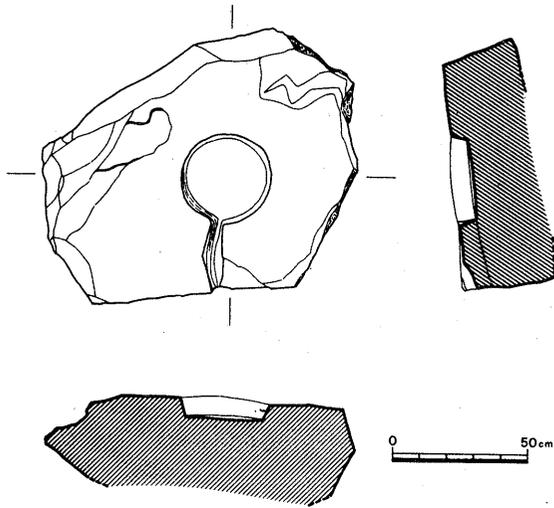
参道の西脇に前面の水田から掘り上げたという心礎がある。2.3m × 2.0mのほぼ台形状を呈する花崗岩の巨石で、その上面に直径65cm、深さ14cmの円形柄穴がある。この柄穴の一画から外方へ一条の水抜き溝が切つてある。この心礎は元は現在の位置から約20mほど南へ寄った所にあったという。この塔跡推定地については今回の調査においてS D 010とS D 011の二条の溝を検出した。S D 010



第4図 講堂(SB001)基壇北辺遺構実測図・土層図



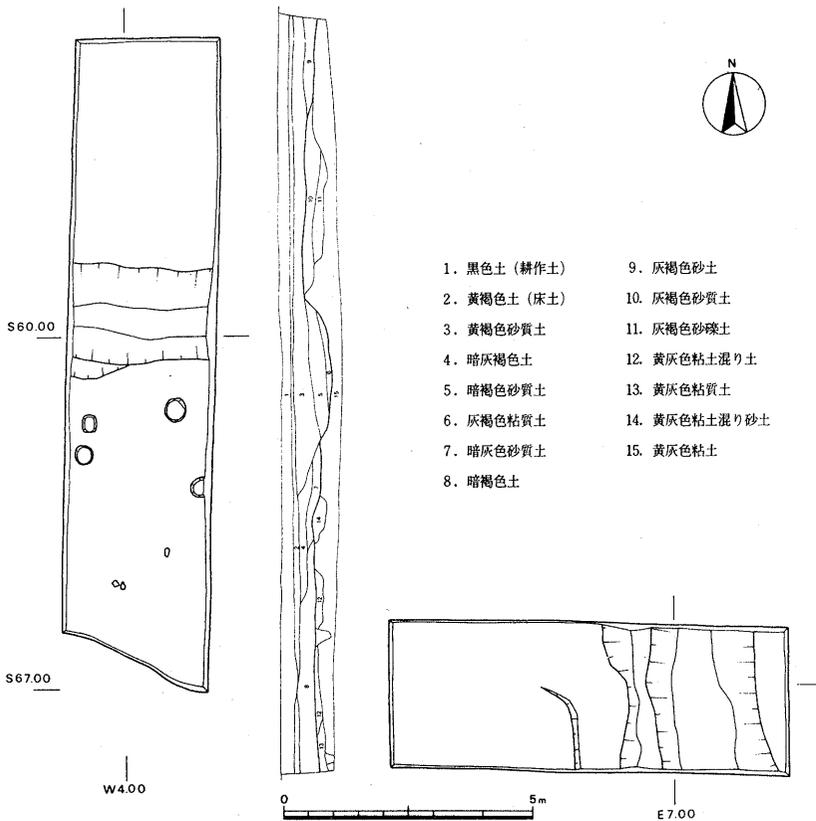
第5図 金堂(SB005)基壇北辺遺構実測図



第6図 塔心礎実測図

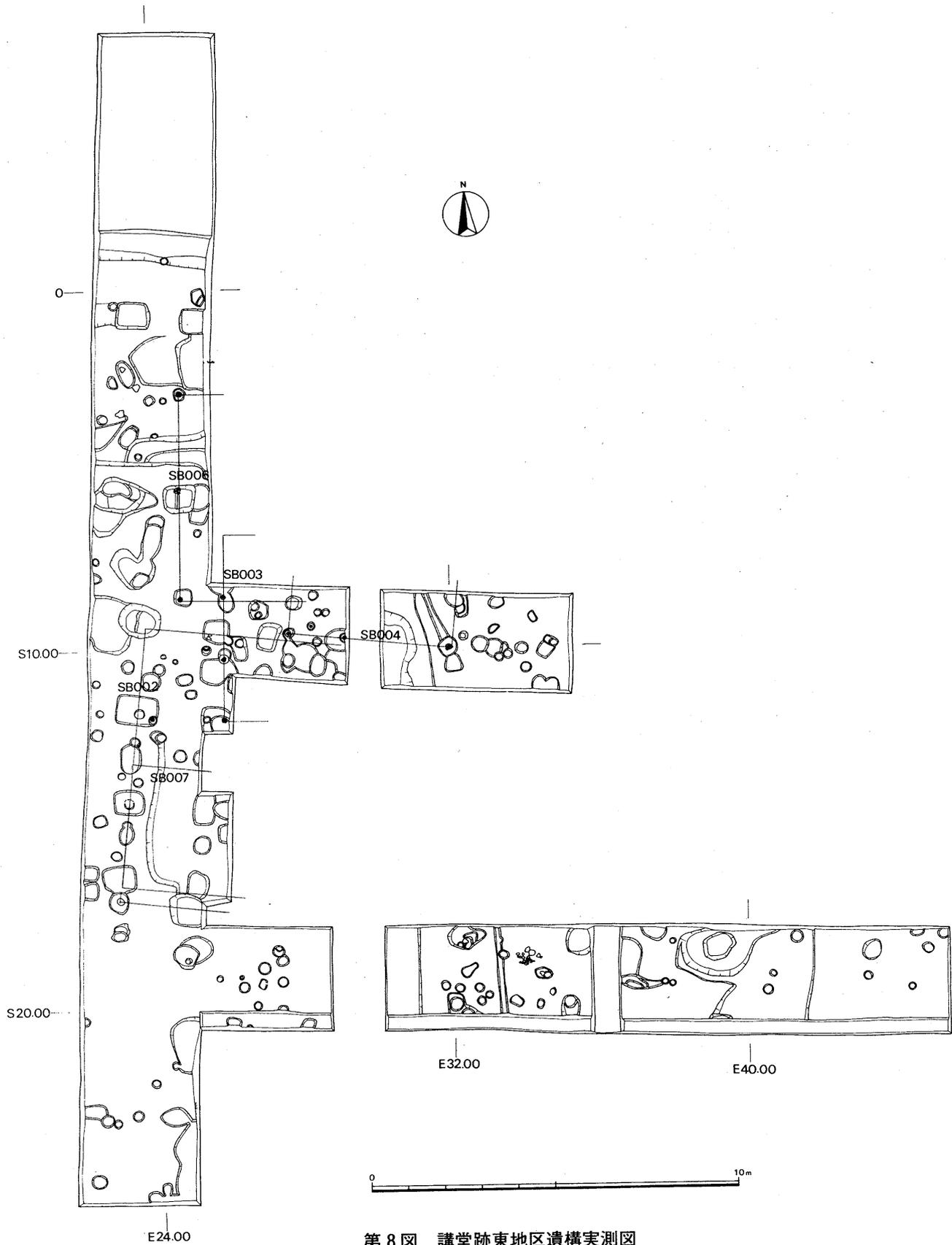
は東西溝で上端幅約 1.8m、深さ40cm
 である。埋土から単弁八弁蓮華文軒丸
 瓦と重弧文軒平瓦を検出した。SD 011
 は南北溝で西側の肩が二段になってお
 り不明瞭であるが下段の肩で測ると幅
 は約 2.0m、深さ50cmを測る。この二
 条の溝は規模や埋土の状況などからL
 字形に連続する可能性が大きく、仮り
 に、この溝が塔を圍繞するものとして
 S D 011を中軸線で西へ折り返すと東
 西の心々距離は約15mとなる。この距
 離を南北にもあてはめてみると南側の
 溝はIトレンチの北側に位置するが、

この部分は
 約1mほど
 低くなって
 おり削平さ
 れている可
 能性が強い。
 この一辺が
 15mの溝に
 よって囲こ
 まれた方形
 の中心は、
 かつて心礎
 があったと
 いう位置に
 ほぼ一致し、
 またSD
 010の埋土
 から軒先瓦
 が採集され



第7図 塔跡遺構実測図・土層図

ていることなどから、この位置を塔跡に考えてほぼ誤りないと思われる。



第 8 図 講堂跡東地区遺構実測図

4. 講堂東地区

この地域では掘立柱建物6棟、炉状遺構のほか大、小のピットを多数検出した。掘立柱建物については調査の性格上から正確な規模を把握できなかったものがある。

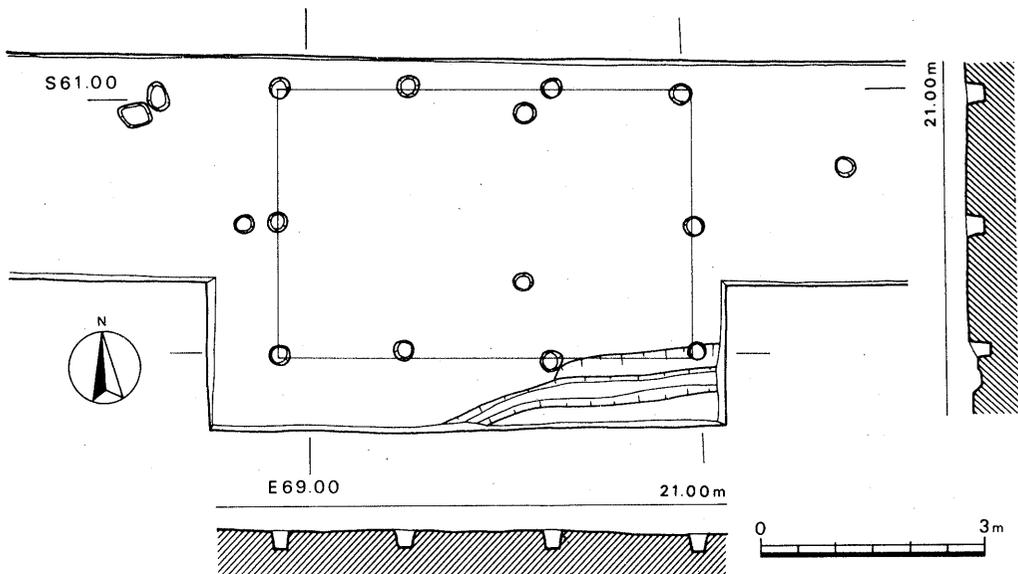
SB002 Jトレンチのほぼ中央部で検出したもので掘り方は不揃いである。3間×3間の総柱建物と考えられる。柱間寸法は南北方向では8尺+8.5尺+8尺である。この建物は東へ若干振れている。

SB003 掘り方は直径30cm前後の円形で、南北方向の柱穴には直径15cmの柱根が残っている。心々距離は1.75m（5.8尺）である。東西方向の柱列は不明であるが3間×2間程度の小規模なものであろう。この建物の柱掘り方はSB002の掘り方を切っている。

SB004 Jトレンチの東拡張区で東西方向に3間分を検出した。柱穴のうち1個は後の土壌で削られている。柱根がよく残っており心々距離は1.48m（5尺）である。この建物は北へへびているが3間×3間程度のもと考えられる。

SB006 Jトレンチ中央部で南北に2間分を検出した。直径40cm前後の掘り方で、いずれも直径15cm程度の柱根が残っている。心々距離は不揃いで9尺と10尺である。この建物は東へ広がるが東西方向は明らかでない。

SB007 SB002に重複して検出した掘立柱建物である。掘り方は不揃いで、南北2間×東西1間以上の総柱建物と考えられる。柱間寸法はすべて1.94m（6.5尺）である。この建物の掘り方はSB002掘り方を切っている。

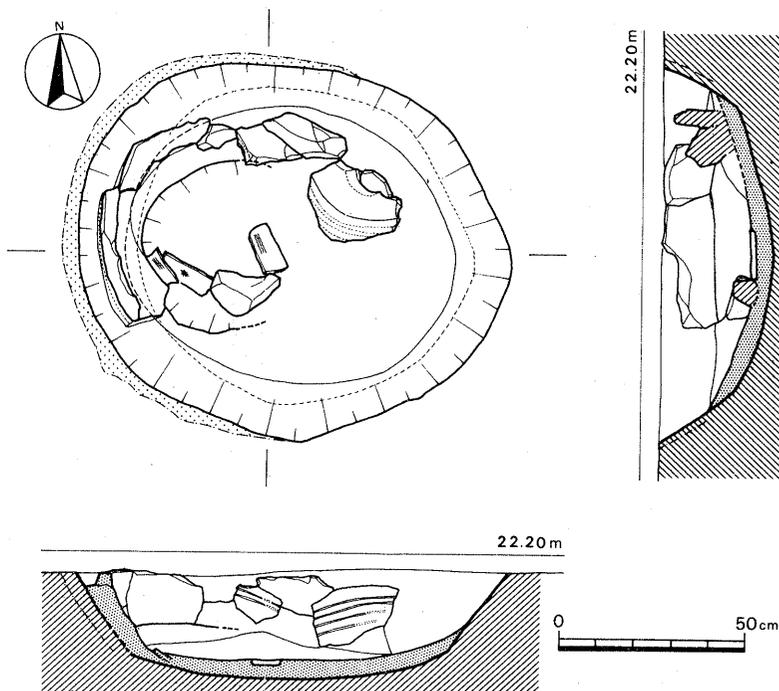


第9図 SB008実測図

SB008 Oトレンチの中央部で検出した建物で東西方向に4間分を検出した。掘り方は直径20cm前後の小規模なもので、心々距離は約2.1m(7尺)であるが、一間分だけ6尺になる。この建物は北へ広がると考えられるが、おそらく2間×4間の建物であろう。

SB009 Oトレンチの東端で検出した2間×3間の東西棟建物である。掘り方はSB008と同様に直径20cm前後の小規模なものである。柱間寸法は多少の出入りがあるが、桁行方向の中央間が約1.95m(6.5尺)で他はすべて1.8m(6尺)である。

SX013 SB008の北側で検出した炉状遺構である。東西1.15m、南北1.0m、深さ0.3mの隋円形のもので、底面は舟底になっている。壁は全体的に堅く焼けしまっている。内部には炭化物が堆積しており、その中から格子目の叩きがある瓦片と土師器の小片を検出した。また内部からスサ入粘土を



第10図 SX013実測図

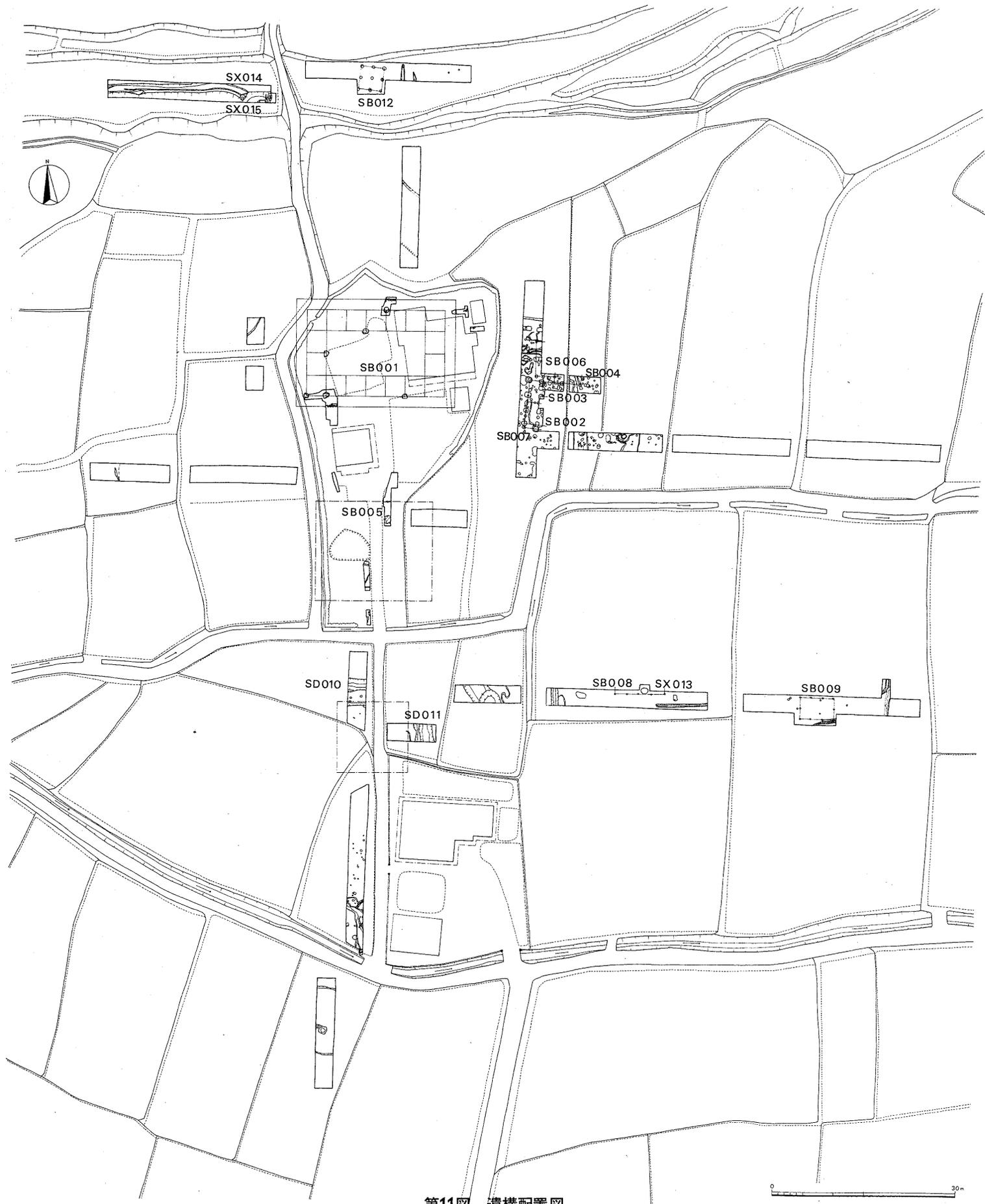
巻き上げて作った直径45cmほどの円筒形のものが検出されたが性格は不明である。

5. 講堂北地区

この地域は主要建物がある願光寺境内よりも約3mほど高くなっており、当初は僧房等の建物が存在するのではないかと考えた。調査の結果は掘立柱建物1棟の他、中世の土壌を検出したのみであった。

SB012 Mトレンチの中央部で検出した。2間×2間の総柱建物である。掘り方は直径50cm前後の円形で柱間寸法は東西方向が1.8m(6尺)南北方向1.9m(6.25尺)である。建物はやや東に振れている。

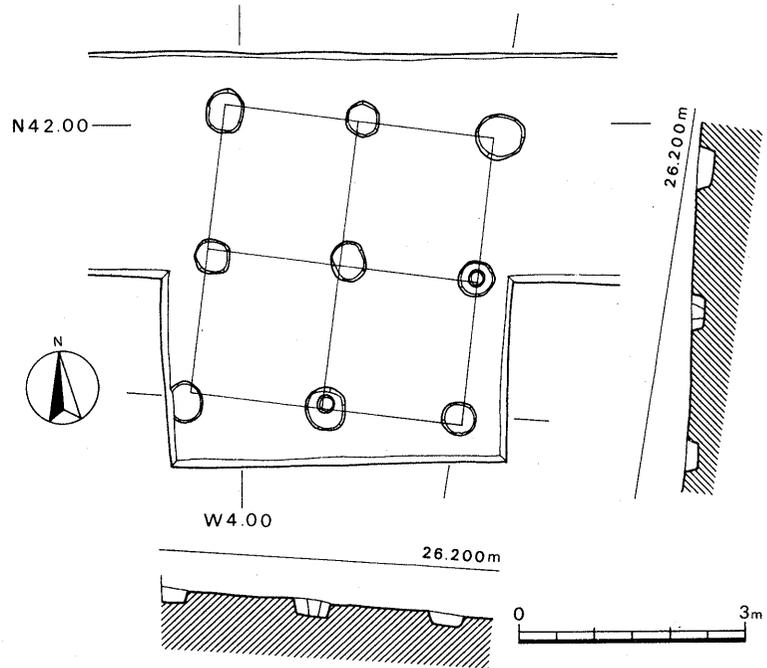
SX014 Nトレンチ東端で検出した大きな落ち込みで、さらに南側へ広がっている。深さは約40cm程度で床面近くには多量の炭化物を含む黒色土が堆積している。この層から土師器片、



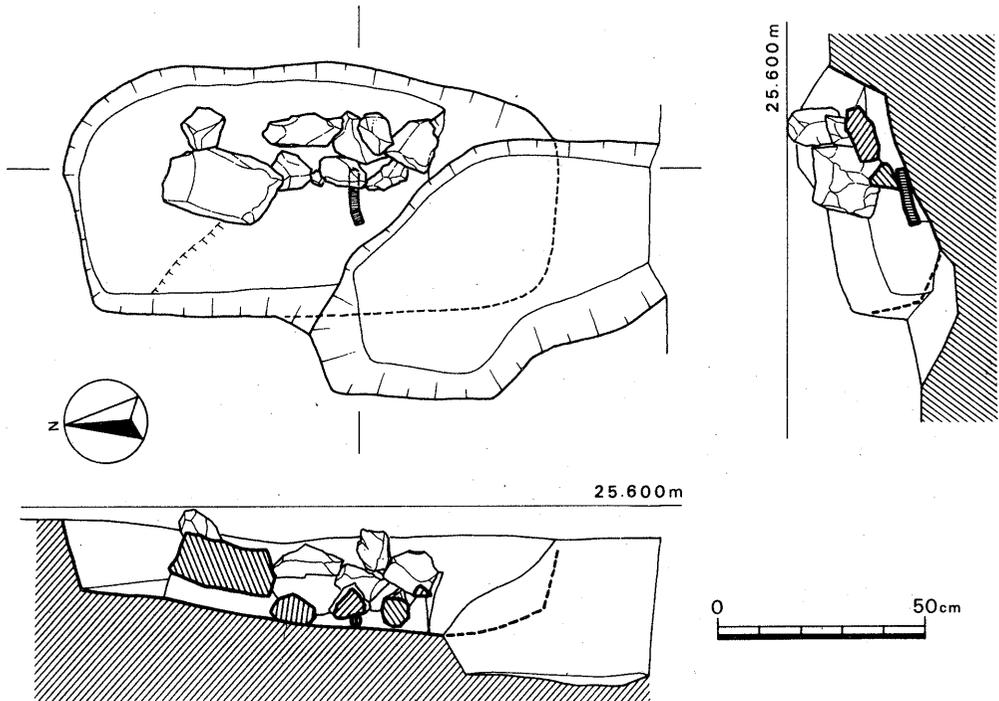
第11図 遺構配置図

瓦および若干の輔羽口を検出した。

SK015 SX014を切っている。長さ1.4m、幅0.6m、深さ0.5mの隅丸方形をした土壇で、床面近くから銅銭94枚が「さし」の状態出土した。その上部には小児頭大の石9個が投げ込まれている。



第12図 SB012実測図



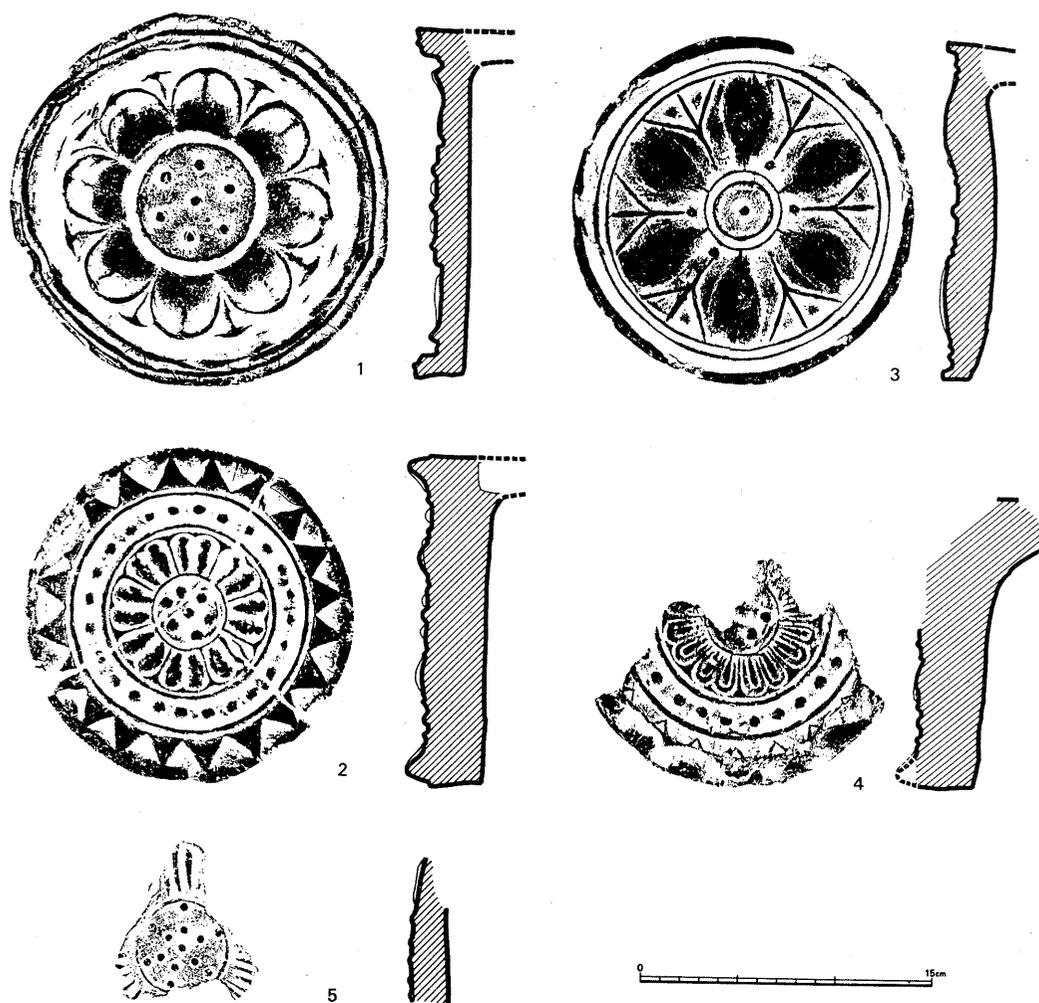
第13図 SX015実測図

V. 遺 物

3次にわたる発掘調査を通して多数の遺物が出土したが、その大部分は瓦類であり、土器類、その他の遺物は比較的少い。以下、瓦類、土器類、その他の遺物についてのべる。

1. 瓦 類

3次にわたる調査で多量の瓦類が出土した。これらは主に講堂背後のA、Fトレンチで検出した落ち込みの埋土や遺構面を覆う暗褐色土から出土した。丸瓦・平瓦・軒先瓦があるが、鷗尾の破片が出土したことは注目される。以下種類ごとにのべる。



第14図 軒丸瓦拓影・実測図

軒丸瓦（第14図、図版15）

5型式64点が出土している。このうちⅠ類の百済系単弁八弁蓮華文軒丸瓦が76%を占めている。またⅡ類の高句麗系のもはOトレンチ西端の瓦溜りから集中的に出土したのが注目される。

Ⅰ類 単弁八弁蓮華文軒丸瓦（1）

いわゆる百済系単弁軒丸瓦とよばれているもので北部九州に集中的に分布している。中房は大きく弁区より一段高い。中に1+6の蓮子を配する。蓮弁の先端はやや尖り気味で強く反転する。各弁の間には楔形の間弁を配している。外縁は直立縁で一重の圏線をめぐらせている。

丸瓦の取り付けは高く外縁付近にくる。丸瓦凸面の叩きは第17図-8の斜格子目であるが、ほとんどすり消している。顎部にも叩きの残るものがある。凹面には竹簾状の模骨痕が認められる。蓮弁の一個所に范割れのあるものがある。この范割れのあるものは京都郡犀川町所在の木山廃寺出土のものにも認められ同范の可能性が高い。

Ⅱ類 単弁六弁蓮華文軒丸瓦（3）

中房は小さく弁区より低い。二重圏線によって囲こまれた中央に小さな蓮子一個を配する。蓮弁は倒卵形の素弁で、上、下端に鍋状の凸線が、わずかに表現されている。各弁の間は下端に珠文を付した松葉状の凸線が間弁風に配されている。外区内縁は二重の圏線がめぐり外縁は幅の狭い直立縁をなす。瓦当裏面はいずれもゆるく外湾し凸面をなす。丸瓦の取り付け位置は高く、裏面の接合粘土の張り付けもわずかである。これと同范と考えられるものが田川市天台寺に知られている。

Ⅲ類 複弁八弁蓮華文軒丸瓦（4）

わずか2点出土している。中房は、やや小さく1+6の蓮子を配する。弁区は界線によって囲む複弁で外区内縁に珠文を、外縁には線鋸歯文をめぐらしている。丸瓦の取り付け位置は低く弁区付近にくる。平城宮跡出土の6284型式の軒丸瓦に酷似している。

Ⅳ類 複弁八弁蓮華文軒丸瓦（2）

Ⅲ類に類似しているが蓮弁と鋸歯文の表現が異なる。中房は一段低く1+6の蓮子を配する。界線によって囲こまれた蓮弁は肉盛りが厚い。外区内縁は珠文を、外縁は大きな凸鋸歯文を配する。瓦当裏面に布目痕を残すものがある。丸瓦の取り付け位置は高い。

Ⅴ類 複弁八弁蓮華文軒丸瓦（5）

3点出土しているが、いずれも小片である。圏線によって囲こまれた中房は大きく、中に1+6+6の小さな蓮子を配する。蓮弁は分離し平担である。外区内縁は比較的密に珠文を配し外縁は素文の直立縁である。丸瓦の取り付け位置は高い。

軒平瓦（第15図、図版16）

総点数で88点が出土しており2型式3種に分類できる。重孤文軒丸瓦が圧倒的に多く全体の

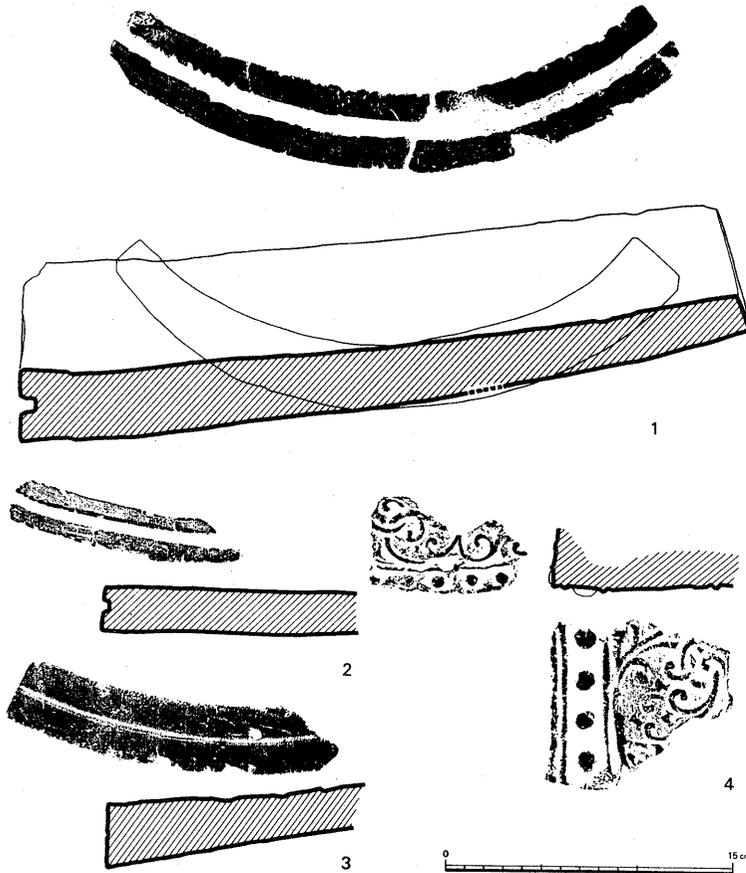
95%を占めている。

I類 重弧文軒平瓦 (1.2.3)

平瓦の広端面に一本の沈線を施して瓦当文様にしたもので二重弧文軒平瓦である。沈線の形状でa、bの2種に細分できる。

まずI-a類は沈線の断面が「コ」字形をなすものである。この類のものは瓦当厚にかなりの相違があり、厚さ2.5cmの通常のものから4.0cmまでのものがある。したがって法量によってさらに細分も可能と考えられるが、技法的には差異は認められないので、ここでは一括してI-a類としてあつかった。瓦当面の沈線は「凸」形をしたヘラ状工具で施文したものと推定されるが詳細は明らかではない。両側面はヘラナデによって丁寧に調整されている。凸面の叩きは第17図-1、2、7、8の斜格子および縄目であるが大部分は横方向のヘラナデによって消されている。

I-b類は瓦当厚3.5cm前後で一定している。中央の沈線はきわめて細く幅3mm、深さは1

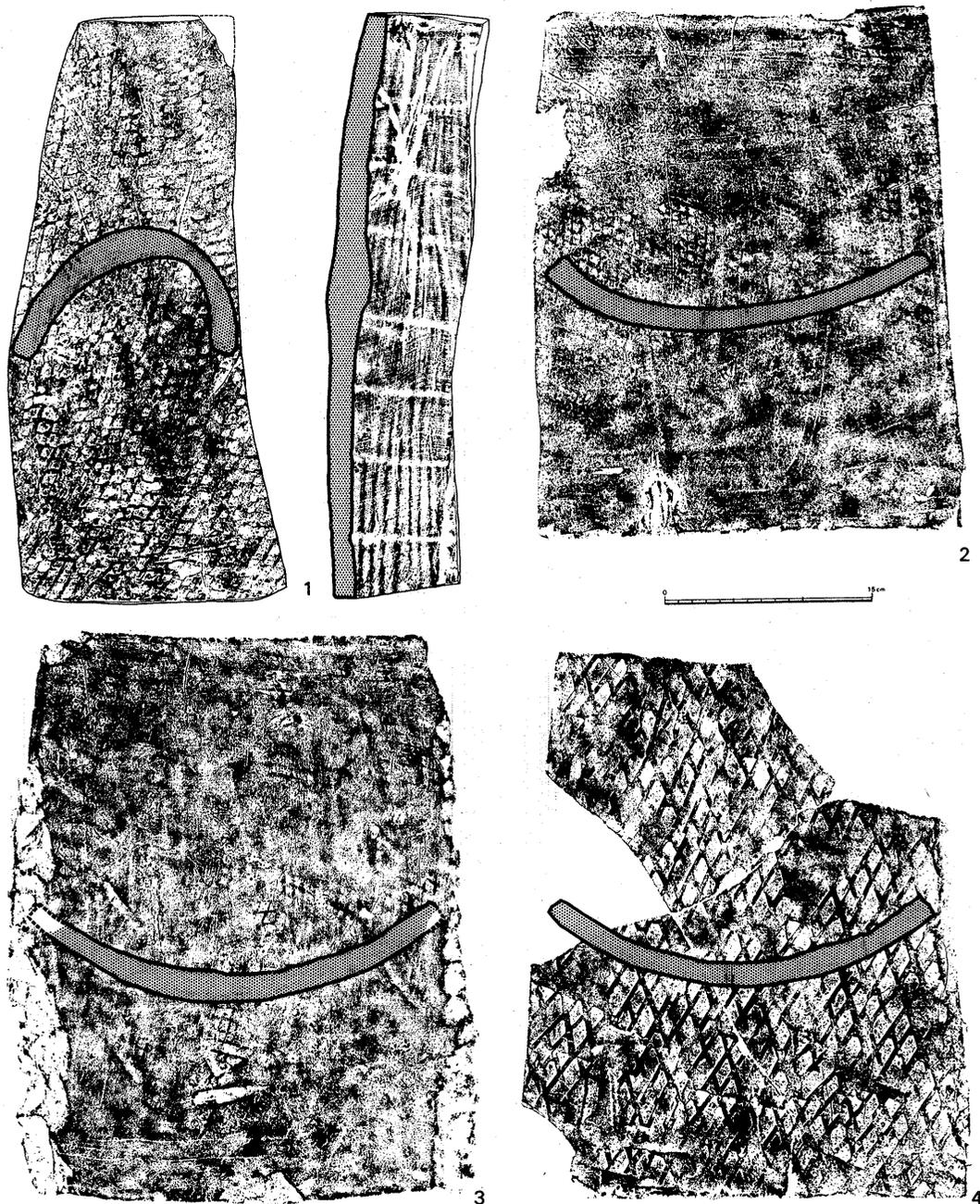


mmに満たないものがほとんどで痕跡程度といってよいほどである。凹面先端部には沈線施文の際に用いたと思われる工具の痕が残っているものがある。両側面はすべてヘラケズリによって調整されている。凸面はヘラナデ、ヘラケズリによって丁寧に調整されているが、一部に第17図-8の叩きが残るものがある。また、ヘラケズリによるものは凹面も同様にヘラケズリ調整されている。

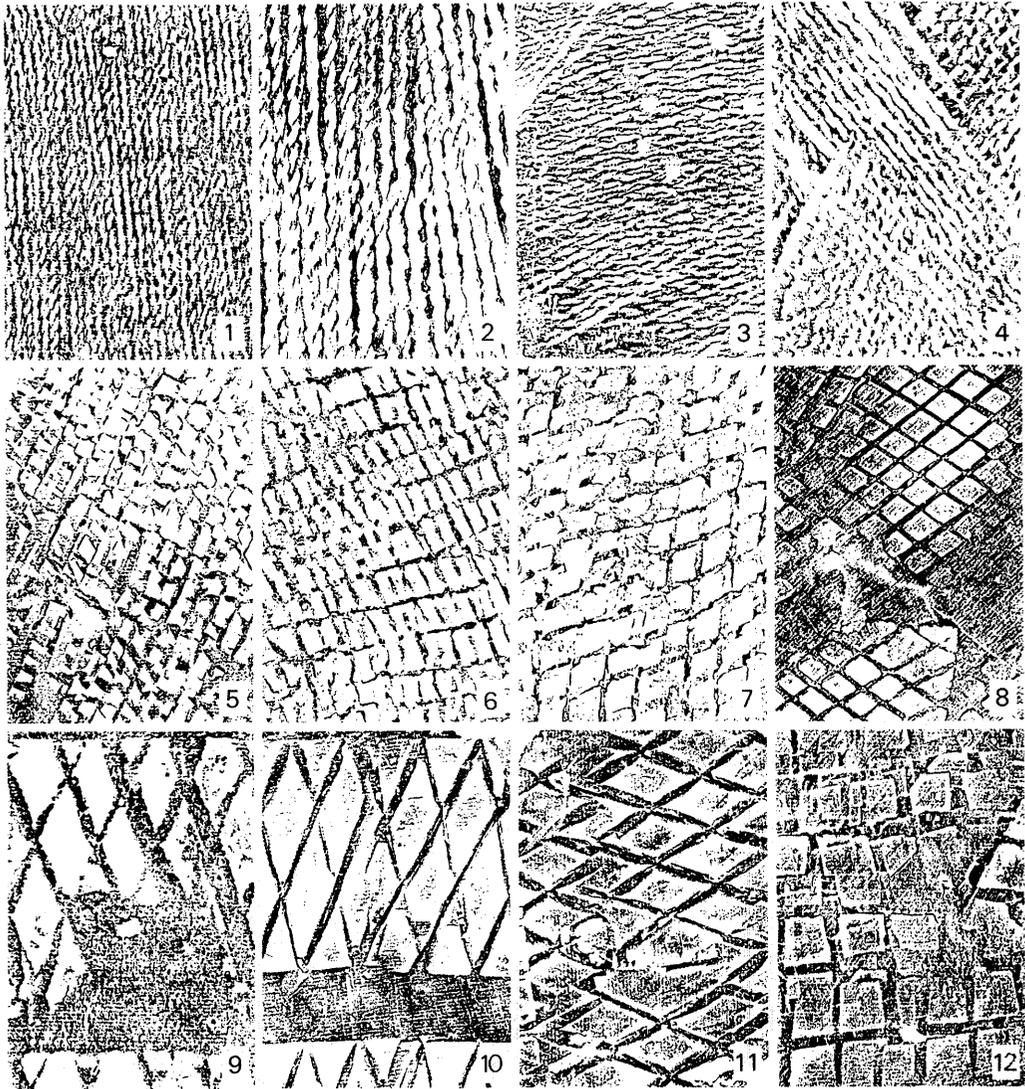
第15図 軒平瓦拓影・実測図

Ⅱ類 扁行唐草文軒平瓦(4)

4点出土したが、いずれも小片であるため全体の文様構成は詳らかでない。内区はのびやかな絡みあった唐草文を配し外区は珠文を配している。顎は深顎で幅12cmを測る。この顎面にも2回反転する宝相華文風の唐草文を配し四周は大きな珠文を密にめぐらしている。これと同形



第16図 丸瓦・平瓦拓影・実測図

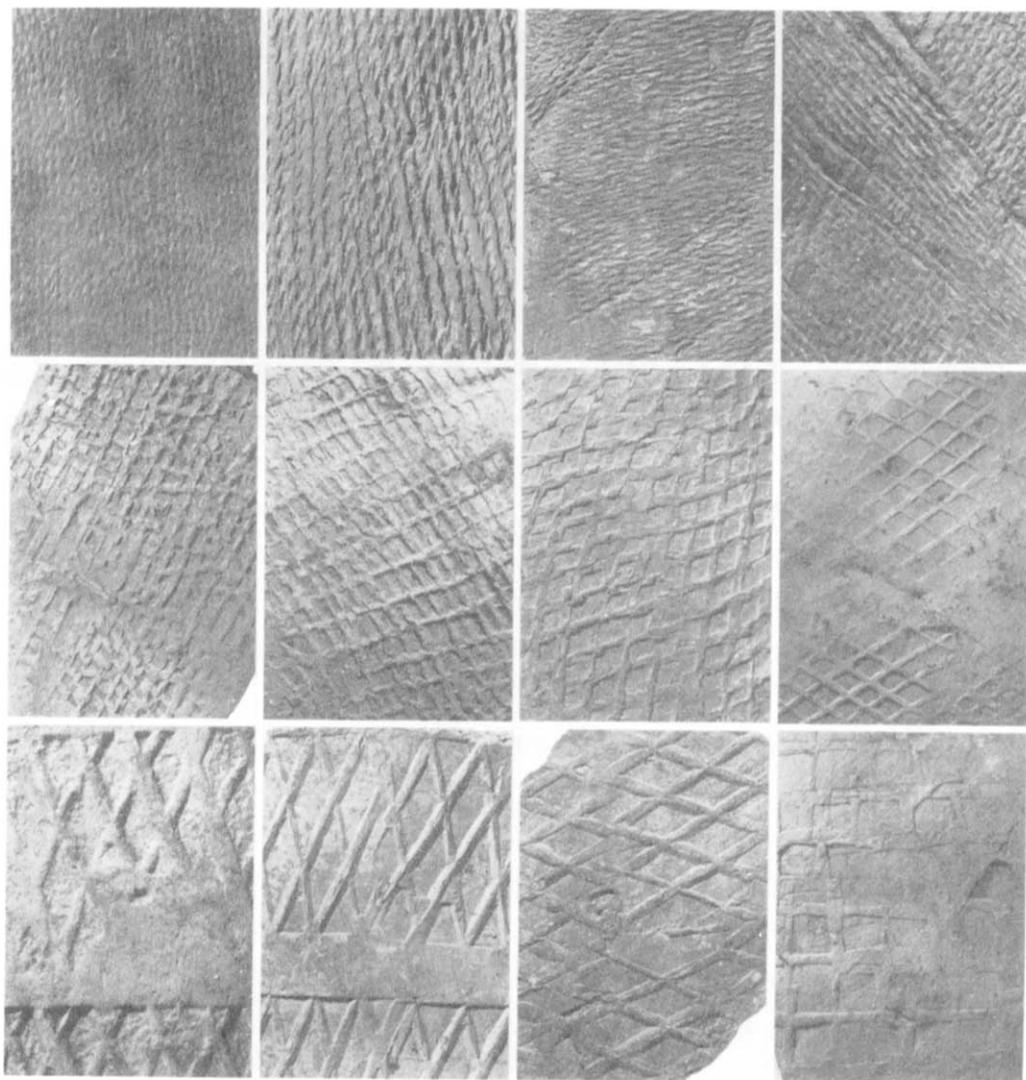


第17図 叩文集成図(拓影) 1/2

式のものゝ嘉穂郡筑穂町所在の大分廃寺から出土している。

丸瓦・平瓦 (第16、17、18図 図版17、18)

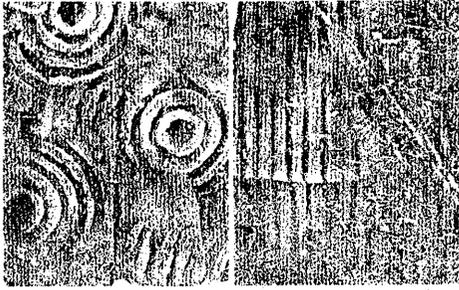
丸瓦には玉縁丸瓦と行基葺丸瓦とがある。いずれも小さな破片であるため全形を知り得るものは第16図-1に示したものの一点のみである。焼けひずみが大きいゝ全長42cm、広端部幅19.2cm、狭端部幅12.5cmを測る。凸面は第17図-7の斜格子の叩きで両側面はヘラケズリによって丁寧ゝ調整している。凹面の模骨痕は通常ゝの円筒形のものではなく、径1cm前後の竹状のもの



第18図 叩文集成図 (写真) 1/2

を連続したものを使用している。この特殊な模骨に最初に注目したのは小田富士雄氏で大分県宇佐市所在の法鏡寺跡出土の瓦の中に、この模骨を使用したものがあることを指摘されている。しかも百済系単弁瓦当文をとまなうもののみに限られるのではないかとされている。^{註①}現在この模骨を使用した丸瓦は相原廃寺、木山廃寺、天台寺廃寺、垂水廃寺、野森窯跡、福六瓦窯跡、山田瓦窯跡などから発見されている。第16図-1は27～28本の竹状材を7ヶ所において紐で連続している。したがって模骨自体は55本前後の竹状材を連続したものと考えられる。

平瓦は、いずれも粘土板による樋巻造りで、両側縁はヘラケズリによって調整している。今



第19図 平瓦叩文拓影

回出土した多量の瓦に、わずか一点であるが第19図に示したような凸面が平行線文、凹面に同心円文のある平瓦が含まれている。この種の類例としては大分県中津市所在の伊藤田窯跡が知られている。

次に丸瓦・平瓦の凸面の叩きは第17、18図に示すごとく縄目4種類、格子目8種類がある。このうち7、8が最も多く、百済系単弁軒丸瓦、重弧文軒平瓦にもなるものである。

鷗尾 (第20図 図版19)

17点の破片がある。主にAおよびFトレンチの瓦層から出土した。器壁の厚さ、色調、焼成などから4個体分が考えられるが、ほとんどが小片であるため、どの部位のものか明らかにし難いものが多い。

1、3、4は器壁の厚さ、色調などからみて同一個体とみられるもので、いずれもヘラ状工具による幅約1cm、深さ0.5cmほどの沈線があり、腹部に近い部分の破片と考えられる。2は前者よりも器壁が薄く別個体であろう。5は羽形をなすもので羽形の中央にわずかに稜線が走る。6は基底部の破片で内・外面はヘラケズリ、ヘラナデによって丁寧に調整されている。

註① 大分県教育委員会『法鏡寺跡・虚空蔵寺跡』大分県文化財調査報告第26集 1973

2. 土器類

土器は調査区域内から多数出土したが、その大部分は弥生土器で、ついで古墳時代の須恵器、土師器が多い。歴史時代のものは極めて少く、それも大部分は細片化している。歴史時代の土器は7世紀末から9世紀代のもものと12世紀以降のものに大きく区分することができ、前者が本廃寺の時期に相当すると考えられる。そこで、ここでは前者を中心に報告するが、後者についても若干触れておく。

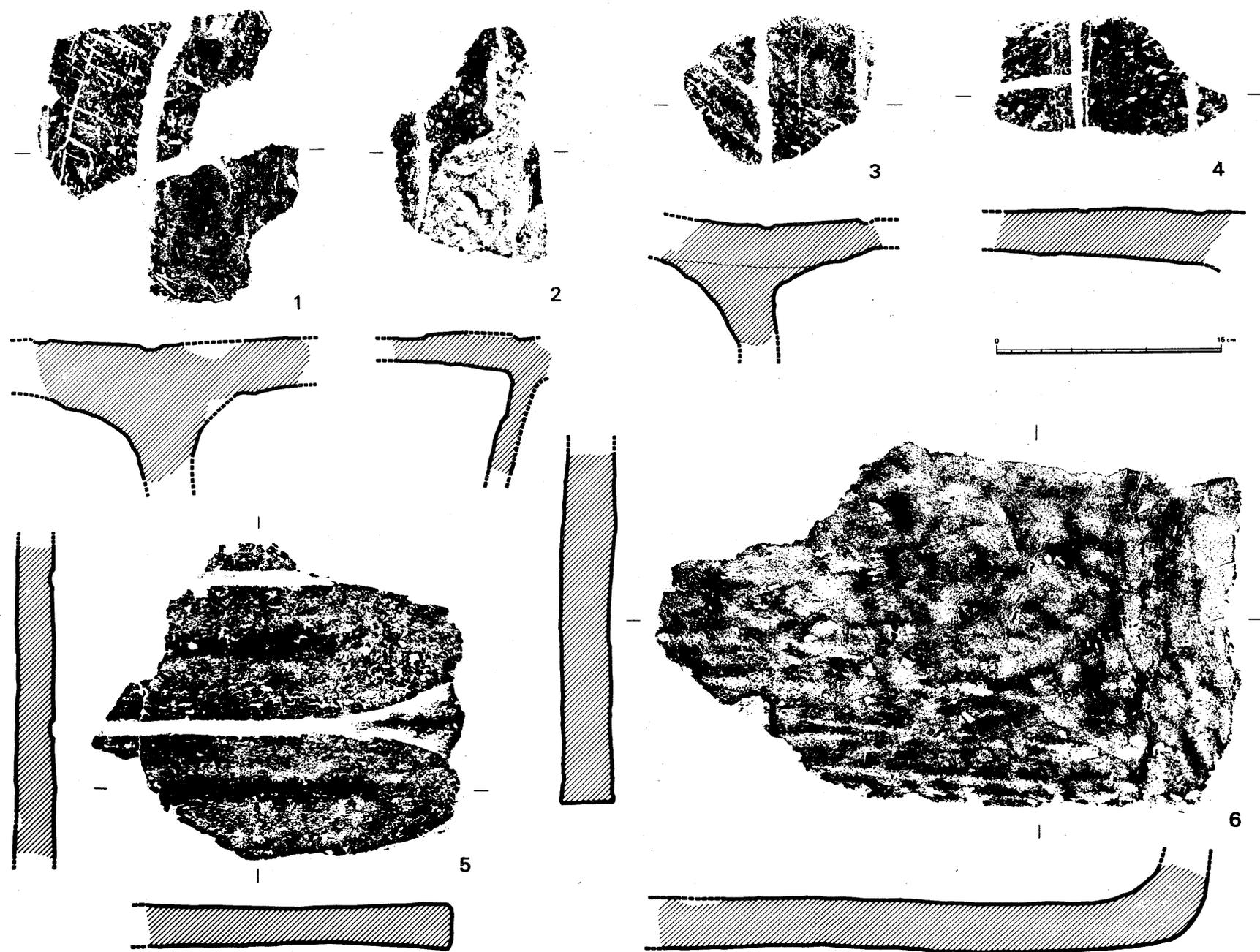
土師器

出土した土師器は杯、椀、甕である。8世紀から9世紀にかけてのものがあるが、9世紀代の椀が比較的目立つ。

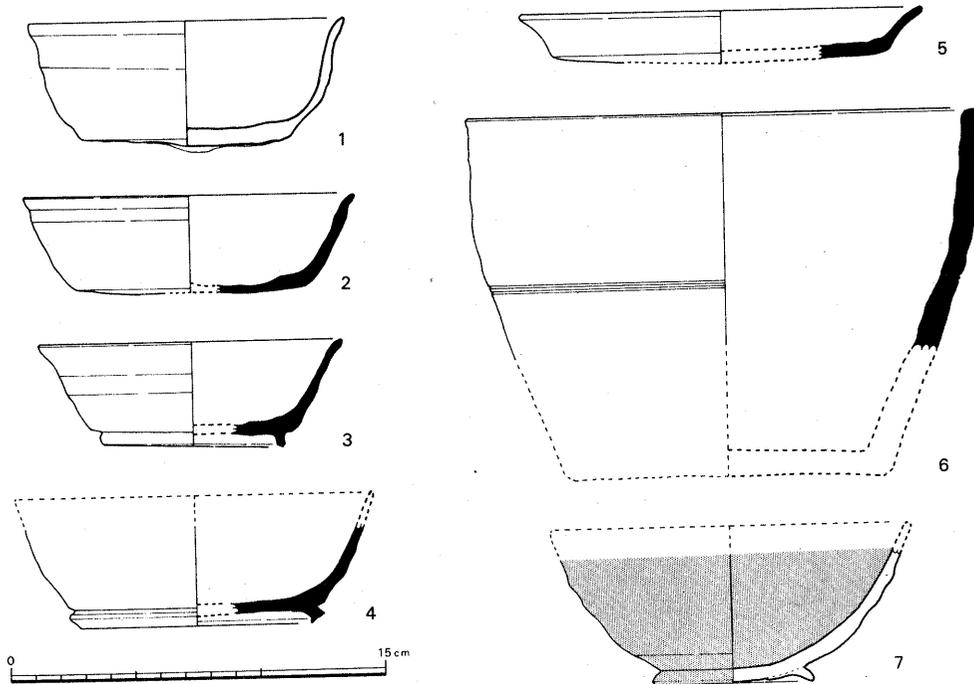
杯(1) 口縁部が若干外反するもので、器壁内外面に漆が濃密に付着している。漆器製作用に使用されたものであろう。口径12.6cm、器高5.0cm、S D 009出土。

須恵器 (第21図2～6 図版20)

杯、椀、皿、甕、壺、鉢がある。8世紀代のもものが、もっとも多く7世紀末、9世紀代のもものが若干量ある。



第20図 鷓尾拓影・実測図



第21図 土器実測図

杯（2） 1と同様に口縁部を若干外反させたものである。焼成は軟質で、器面が摩滅しており、調整は知り得ないが、ヘラ削りを行っていないようである。また重ね焼きのためか口縁部は灰白色を、他は黒色を呈する。口径13.2cm、器高 3.9cm、Fトレンチ瓦溜り出土。

碗（3.4） 3は細く低い高台を底部端より、やや内側に貼付したもので、体部内外面ともにヨコナデ、ナデ調整がある。口径12.1cm、器高 4.1cm Gトレンチ瓦尽出土。

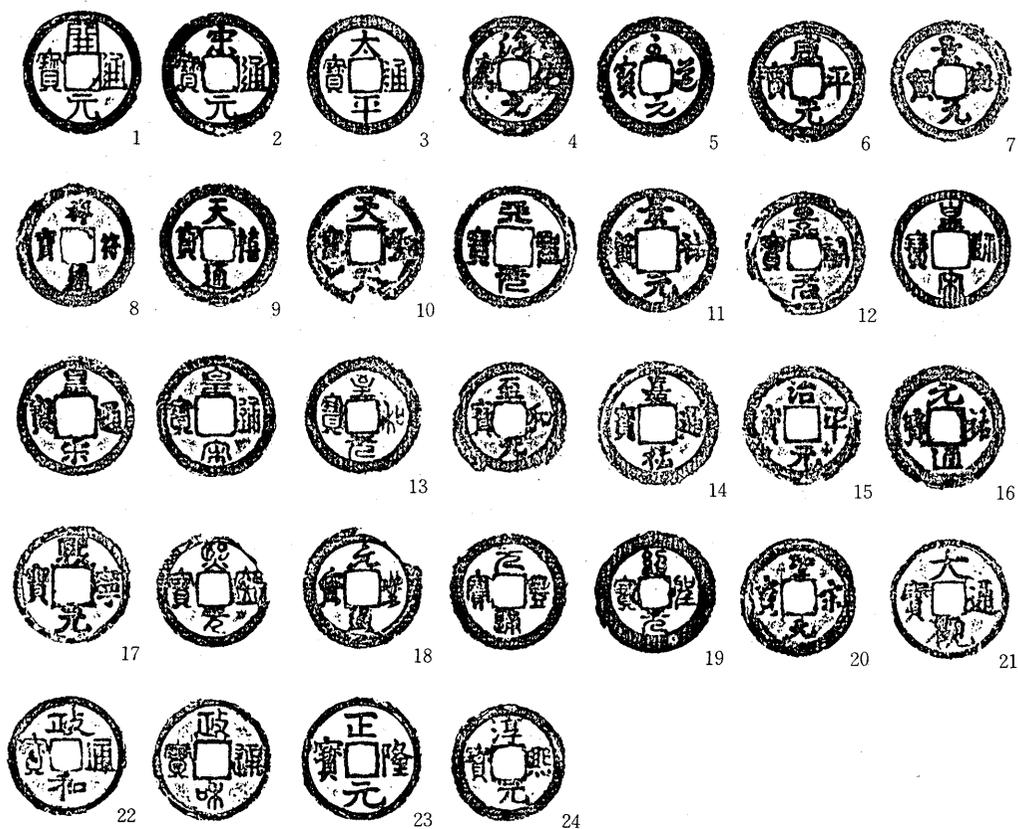
4 なると同様に高台貼付部分は底部端より内側にあり、畳付部分が外側に傾斜したものである。体部内外面はヨコナデ、ナデ調整のみである。Fトレンチ瓦溜り出土。

皿（5） 体部が外弯し、若干丸味を有する底部をなす。外底部はヘラナデによりヘラキリ痕を消している。他の部分はヨコナデ調整である。口径16.2cm、器高 2.1cm、Gトレンチ瓦層出土。

鉢（6） 体部下半および底部を欠失しているため正確な器形を知り得ないが、残存部の形状から平底の鉢になるものと考えられる。残存部分はすべてヨコナデ調整である。胎土は砂粒が少なく、焼成は堅緻である。小破片のため正確さを欠くが復原口径20.5cmを測る。Cトレンチ瓦層出土。

磁器（7）

碗（7） 器肉が薄く、外反する高台を有するものである。内面は器面摩滅のためミガキの



第22圖 S X 015出土銅錢拓影(2/3)

番号	種類	初鑄年代	数	番号	種類	初鑄年代	数
1	開元通寶	621	9	14	嘉祐通寶	1056	4
2	宋元通寶	960	1	15	治平元寶	1064	1
3	太平通寶	976	1	16	元祐通寶	1068	5
4	淳化元寶	990	1	17	熙寧元寶	1068	8
5	至道元寶	995	3	18	元豐通寶	1078	10
6	咸平元寶	998	4	19	紹聖元寶	1094	1
7	景德元寶	1004	1	20	聖宋元寶	1101	3
8	祥符通寶	1008	1	21	大觀通寶	1107	1
9	天禧通寶	1017	3	22	政和通寶	1111	4
10	天聖元寶	1023	5	23	正隆元寶	1156	1
11	景祐元寶	1034	5	24	淳熙元寶	1174	2
12	皇宋通寶	1039	12	25	不明		6
13	至和元寶	1054	2	26	合計		94

第3表 S X 015出土銅錢分類表

方法を知り得ないが、外面には指頭圧痕がよく残っている。内外面ともに黒色に燻され一見黒色土器風であるが、胎土中には砂粒が多く、また乱雑な指頭圧痕等から軟質に焼成された瓦器碗と考えられる。

輸入陶磁器

中国南方産の白磁碗1点、龍泉窯系青磁碗2点、香爐1点、同安窯系皿1点がある。いずれも小破片のため図示できないが時期的には12～13世紀代のものである。

3. その他の遺物

銅銭 (第22図 図版21)

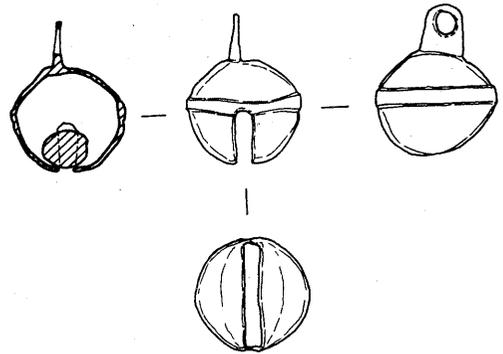
S K 015から出土したもので合計94枚が、いわゆる「さし」の状態で見つされた。保存状況は比較的良く第3表に示したごとく24種類に分類できる。種類別では「皇宋通宝」が12枚で最も多く、ついで「元豊通宝」「開元通宝」が多い。年代的に最も下るものは 淳熙元年 (1174) 初鑄の「淳熙元宝」である。24種類のうち南宋のものは「正隆元宝」「淳熙元宝」の2種類3枚のみで、他はすべて北宋のものである。このような点から S K 013の遺構の年代をほぼ平安末ないし鎌倉初期に考えて大過ないであろう。

銅鈴 (第23図 図版20)

Nトレンチの床土から出土したもので直径 2.4cm、通高 2.9cmの鑄造によるものである。球体のほぼ中央に幅 2.5cmの凸帯がめぐる。鈕はコハゼ形のもので球体と同時に鑄造されている。丸は直径7mmの円形の銅製である。

鞆羽口

S K 012から出土した。すべて小さな破片で原形を復元できるものはない。いずれも赤味を帯びた灰褐色で、胎土は砂礫を多量に含んでいる。



第23図 銅鈴実測図

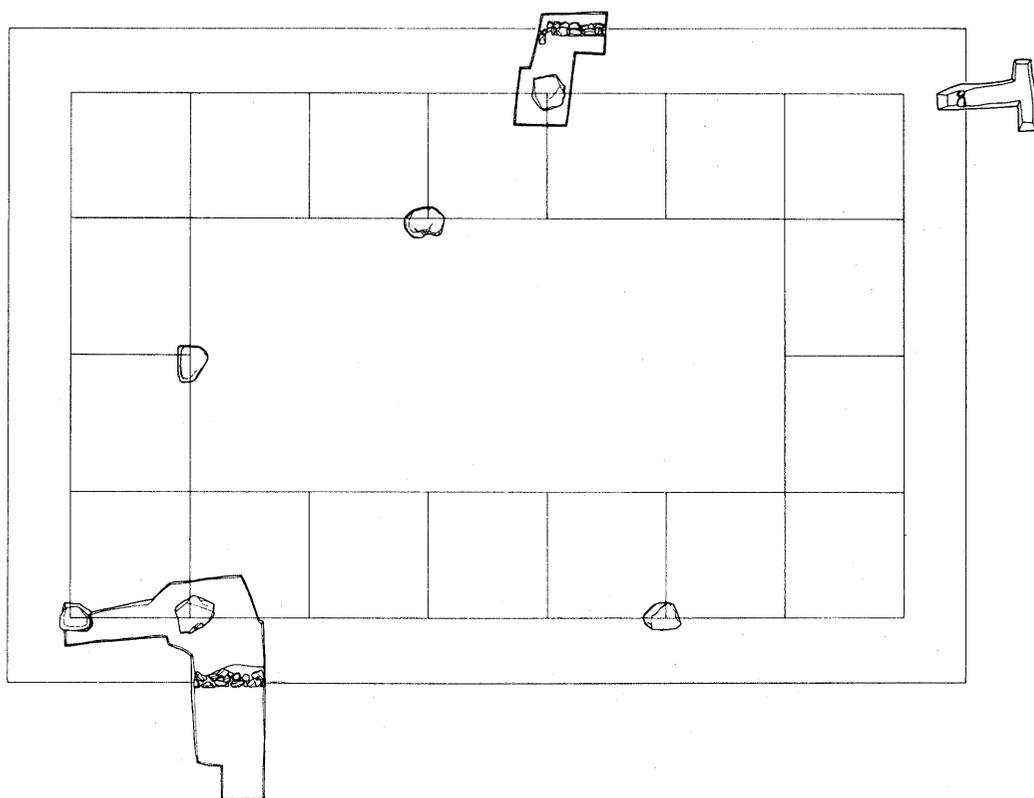
VI. ま と め

3ヶ年にわたって行った発掘調査は延面積約 1,300㎡、対象地域は東西 140m、南北 210m の範囲に及んだ。その成果についてはこれまで報告したとおりであるが、当初われわれが意図した問題点を十分に明らかにし得たとはいえず、今後さらに調査を行う必要性が痛感される。

まず伽藍配置については昭和31年に行われた測量調査によって四天王寺式伽藍配置が想定された。現庫裡下の礎石が現存する遺構は調査の結果、桁行77尺、奥行28尺の7間×4間の建物であることが明らかとなった。この建物は背後の地形からみて講堂と考へてまず誤りないものとする。次に金堂、塔については残念ながらその遺構を明らかにすることができなかった。しかしながら、金堂跡推定地において検出した玉石列は移動しているとはいえ、その北側に広がる瓦敷き遺構との関係から、この玉石列付近が建物の北端をなしているものとして考へて大過ないものとする。また塔跡についてはその位置を確定することはきわめて根拠薄弱であるが、S D 010、S D 011の存在は無視できないであろう。このように考へた時、椿市廃寺の伽藍配置については当初の想定どおり、四天王寺式が最も妥当と考へられるが、建物相互間の距離について若干検討を要する点がある。すなわち、通常四天王寺式の伽藍配置の場合、塔と金堂および金堂と講堂との間の距離は1:1.5となるのが普通である。椿市廃寺の場合、不確定要素が多いが上記のとおり考へた場合、その距離関係はほぼ等距離となり疑問が残る。今後の検討課題である。金堂、塔跡については広範囲にわたる調査を行う必要がある。次に寺域については、これも測量調査の結果1町半四方と推定されている。しかしながら発掘調査の結果は寺域を画するとみられるような遺構は何ら検出できず、これを明らかにすることはできなかった。昭和48年から3ヶ年にわたって発掘調査が行われた築上郡新吉富村所在の垂水廃寺の場合は検出遺構から方2町とされている。椿市廃寺の場合は講堂の位置や周囲の地形からみて、1町ないし2町四方が妥当のように思われる。^{註①}

出土遺物としては瓦、土器、銅銭等があるが、ここでは瓦類について若干ふれておこう。まず軒丸瓦ではⅠ類の単弁八弁蓮華文が76%を占め、軒平瓦はⅠ-a類、重弧文が95%と圧倒的に多く、これらはセットをなすものであり創建瓦と考へてさしつかえないであろう。この単弁八弁蓮華文軒丸瓦の場合、丸瓦部凹面の模骨痕はすでにのべた如くきわめて特徴的なものである。現在のところ小田富士雄氏も指適されているごとく百済系単弁八弁蓮華文に伴うものがほとんどで地域的には豊前地方に集中しているが最近では福岡市南区三宅所在の三宅廃寺でも発見されている。時期的には7世紀後半から8世紀初頭くらいが考へられるが、このような技法の源流がどこにあるのか現在の段階では明らかではないが、瓦当文との関係から百済の技術をうけている可能性は考慮に入れておく必要がある。^{註②}

次に軒丸瓦Ⅱ類（高句麗系）は同範とみられるものが田川市所在の天台寺にあり、また軒平



第24図 講堂復原図

瓦Ⅱ類（新羅系）は嘉穂郡穂波町所在の大分廃寺に類例がある。この2種の瓦は豊前地方における寺院相互の需給関係を検討するうえで好資料となるものであるが、それと同時に椿市廃寺においては、これらと組み合う瓦は出土しておらず、百済系単弁軒丸瓦が主流を占めるなかでどのような位置を占めていたのか今後検討を要する課題である。

八世紀代にはいと九州全域にわたって大宰府系の瓦が分布するようになるが、これは国分寺の建立事業と密接な関係を有していると考えられる。軒丸瓦Ⅲ・Ⅳ類はいずれも複弁八弁蓮華文で大宰府出土の老司式の影響がうかがわれるものであるが、それだけでは律しきれない点もある。すなわちⅢ類の外区外縁は線鋸齒文であり、九州では例の少ないものである。またこのⅢ類が平城宮跡出土の6284型式に酷似していることは、これらの瓦には畿内からの影響がたらしている可能性があることを考慮しておく必要がある。

軒丸瓦Ⅴ類は鴻臚館式の系統に属するものであるが、蓮弁のくずれが目立ち、今回出土したものの中では時期的に最も下のものであろう。具体的な時期については推測の域をでないが、今回出土した土器の年代観を考慮すると八世紀末から九世紀前半代に考えて大過ないものと考ええる。

次に鴟尾は4個体分あると考えられるが、いずれも破片であるため全形をうかがい得るものはない。今回出土した破片の中で、第20図-5の羽形を表現したものは本廃寺出土鴟尾の特色を示していると考えられるが、これに類似したものとして奈良県山田寺出土のものがある。このような羽形を表現したものは七世紀中頃から後半にかけて行われたことが指摘されており、本廃寺出土の鴟尾もほぼ七世紀後半のものと考えてさしつかえないであろう。

最後に本廃寺の存続年代は、出土古瓦、および土器類からみて七世紀後半から九世紀代にかけて存続したものとみて大過ないものとする。^{註④}

註① 新吉富村教育委員会『垂水廃寺』新吉富村文化財調査報告書 第2集 1976

註② 大分県教育委員会『法鏡寺、虚空蔵寺跡』大分県文化財調査報告 第26集 1973

註③ 福岡市教育委員会『三宅廃寺』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第50集 1979

註④ 大脇 潔「古代日本の鴟尾」

追 記

本廃寺出土の軒丸瓦のうち、Ⅲ類の複弁八弁蓮華文軒丸瓦については、平城宮跡出土の6284型式に酷似していることを指摘したが、脱稿後、現物をつきあわせて検討した結果、このⅢ類は平城宮跡出土の6284-F型式と同範であることが判明した。またⅣ類としたものは、このⅢ類の蓮弁と鋸歯文に手を加えたものである可能性が大きい。詳細については別途機会をみて発表したいと考えている。なお、検討に際しては奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部第三調査室の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。

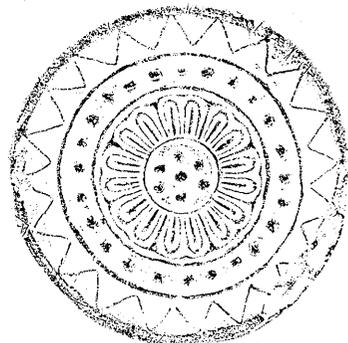
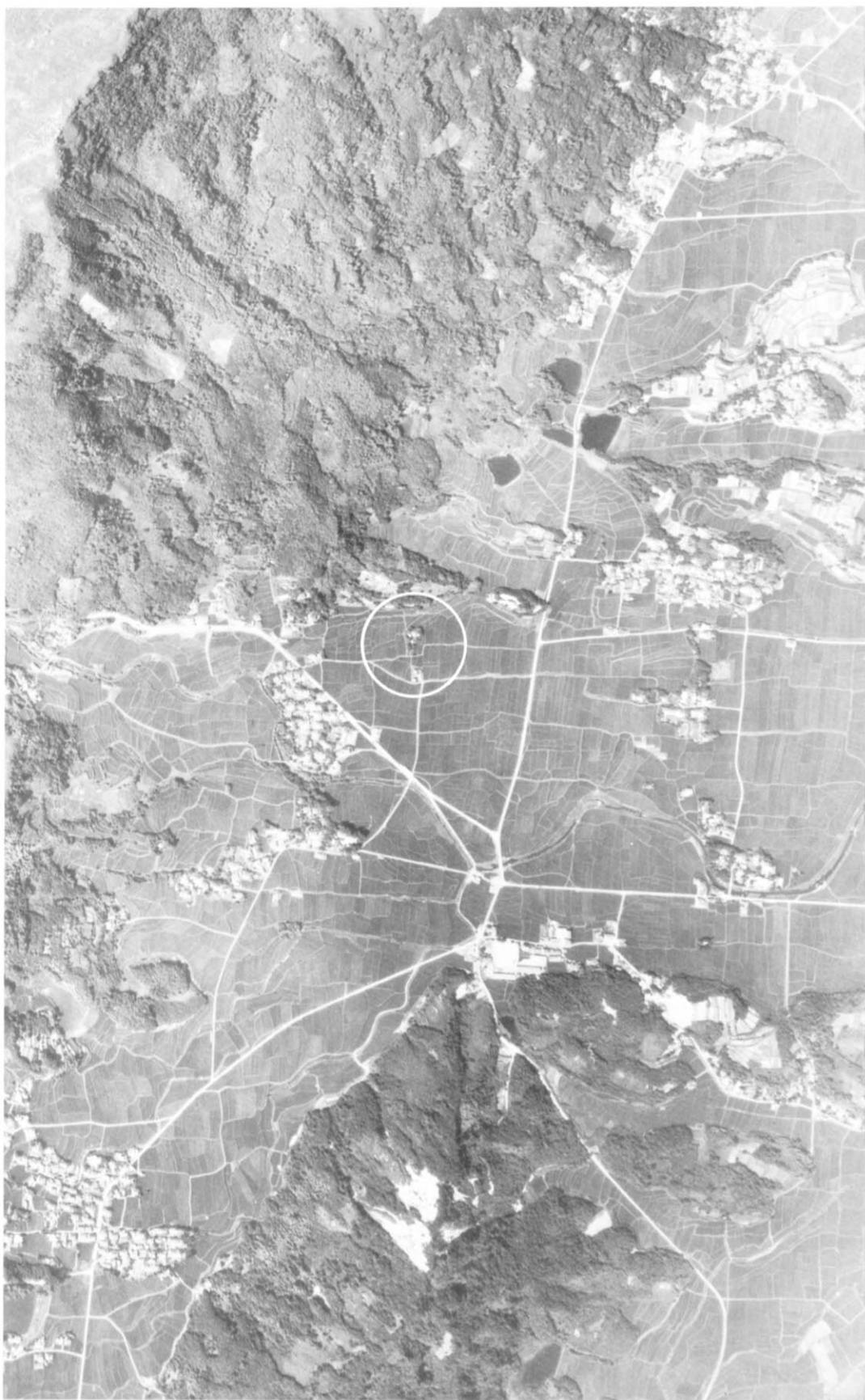


圖 版



図版 1 椿市麩寺周辺航空写真



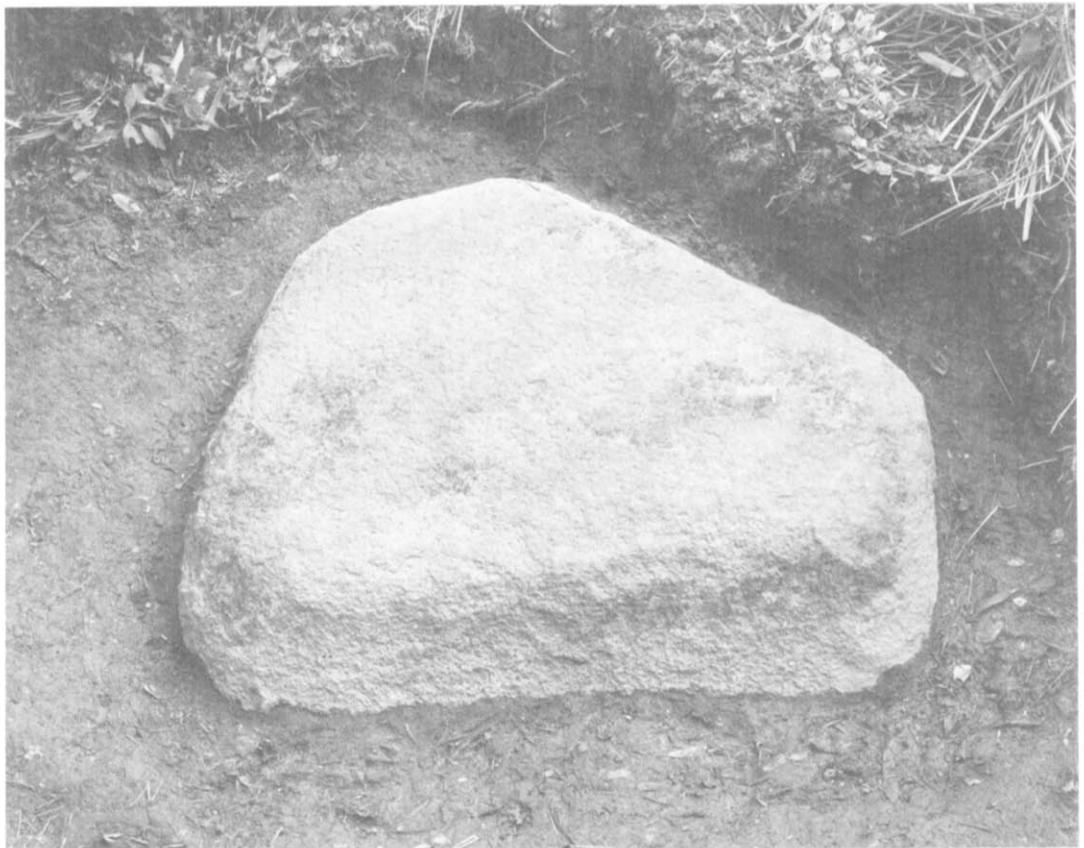
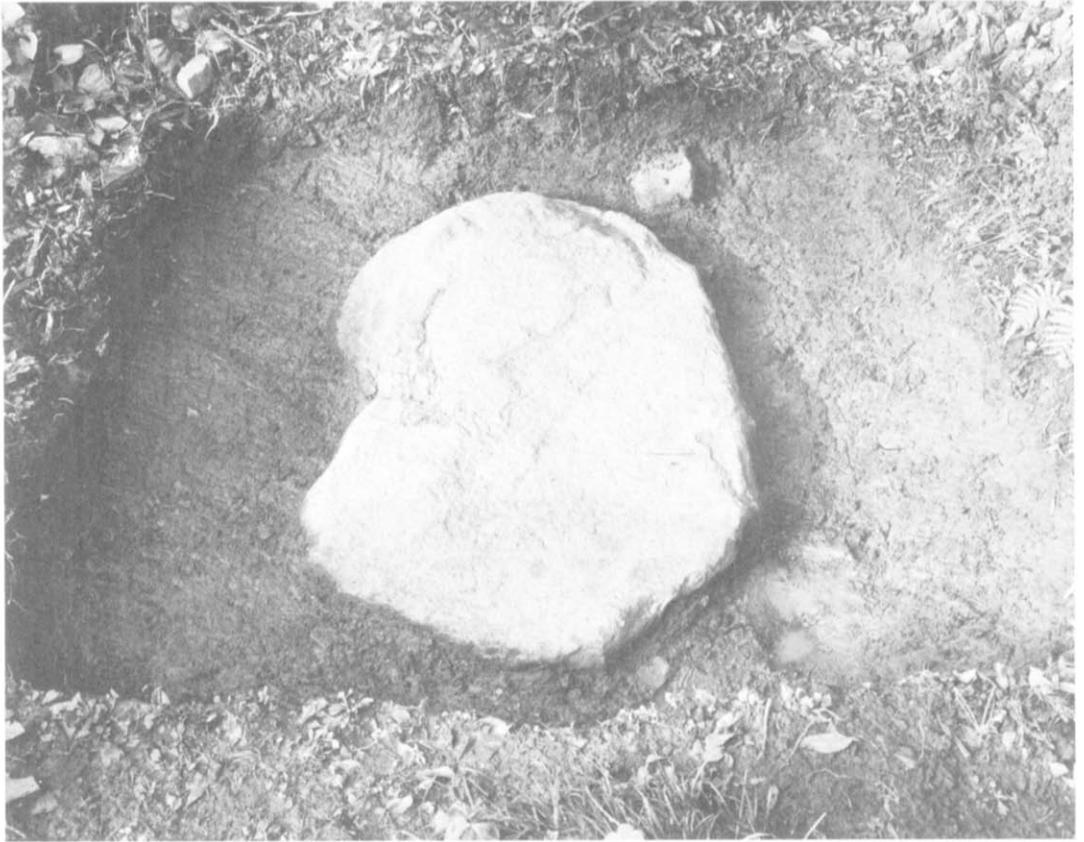
図版2 講堂基壇南辺 上(南から) 下(東から)



図版 3

- 上. 講堂基壇北辺
 (北から)
下. " 南辺
 (南から)





図版4 講堂礎石

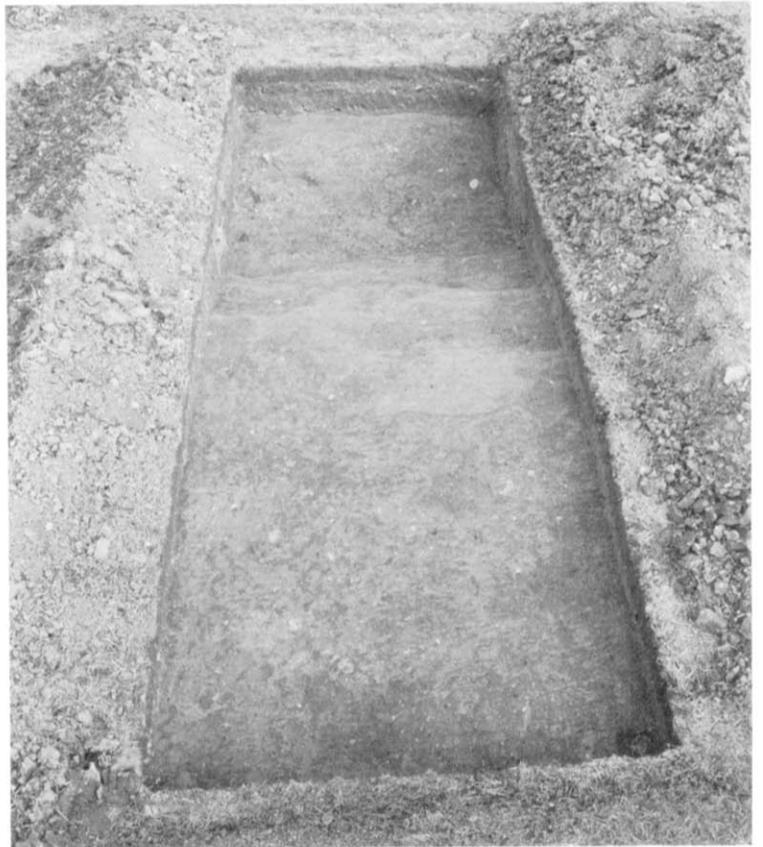
図版 5

- 上. 金堂基壇北辺
 (北から)
- 下. 金堂南辺トレンチ
 (北から)



図版 6

上・溝 S D 010 (南から)
下・溝 S D 011 (西から)

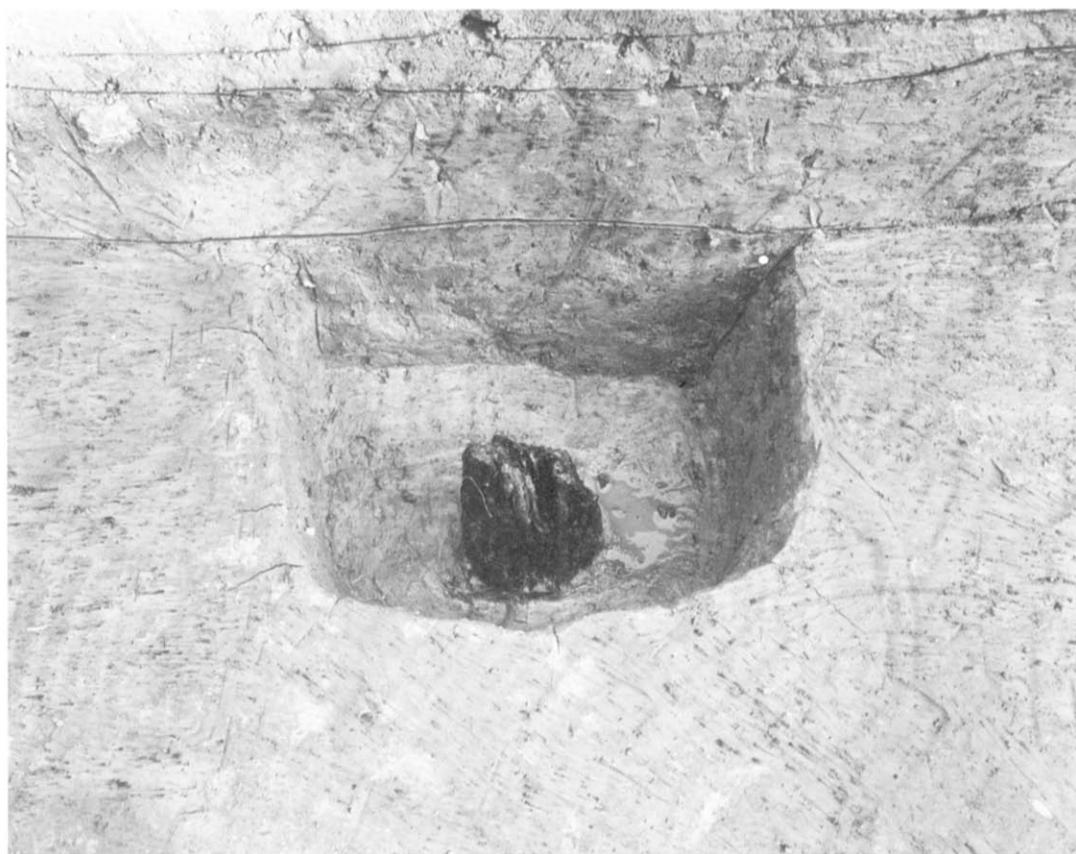


図版 7

上. 講堂東地区全景
(南から)

下. SB 002. 003. 004
建物 (西から)





图版8 SB 006 柱根

図版 9

上. オトレンチ全景
(西から)

下. S B 007 建物
(西から)





図版10 上. SB 009 建物(西から) 下. SX 013 炉状遺構(北から)

図版11

上. Mトレンチ全景(西から)

下. SB 012 建物(北から)

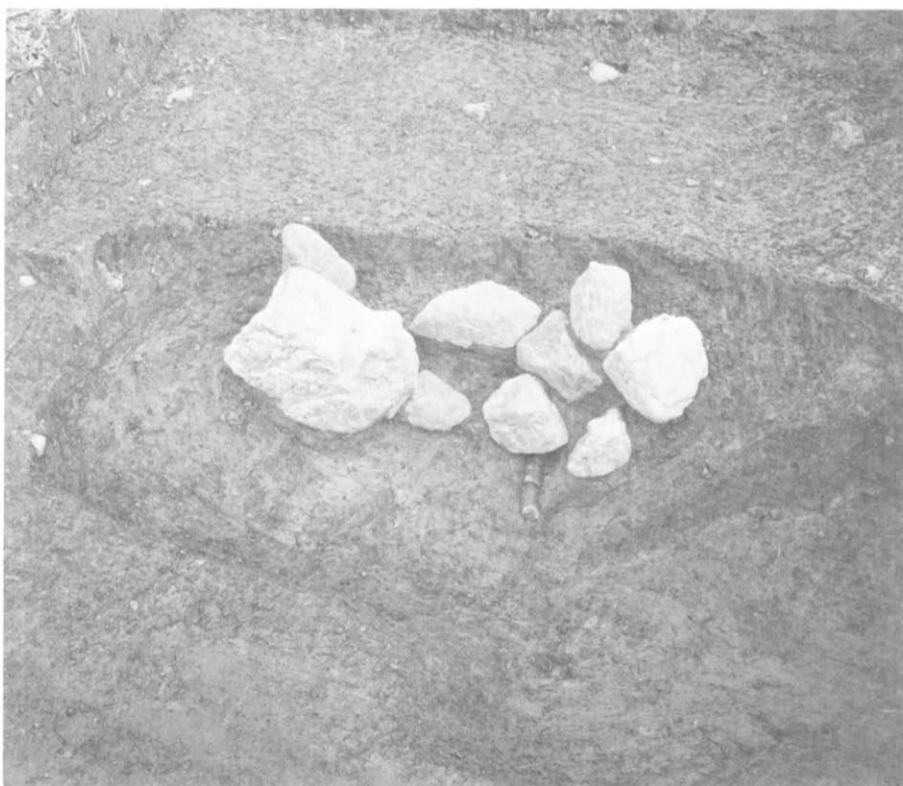




図版12

上. Nトレンチ全景(東から)

下. SX 015 (西から)

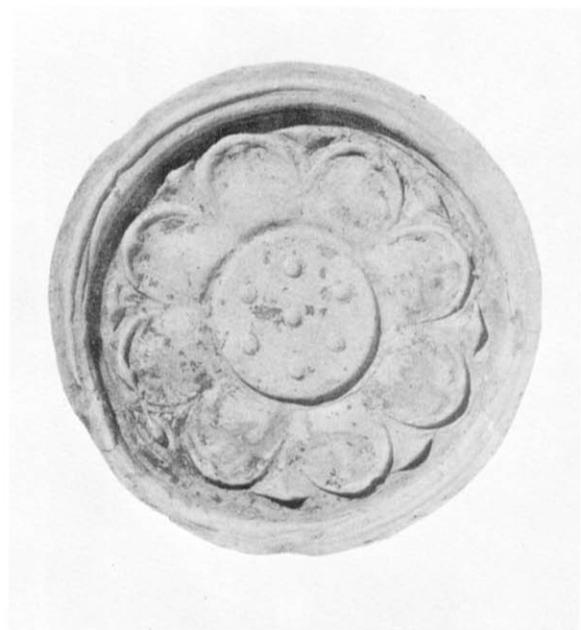




図版13 上. 塔心礎(東から) 下. 願光寺境内所在の礎石(東から)

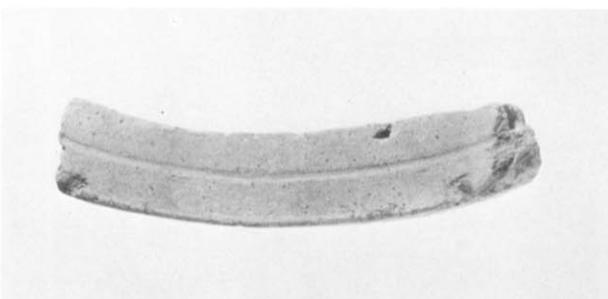
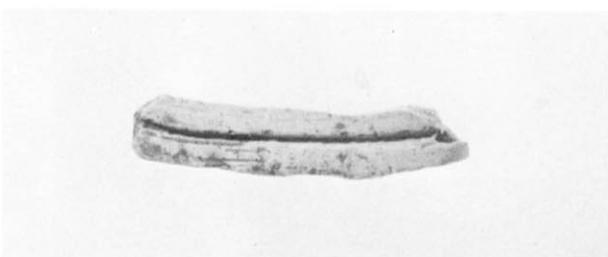
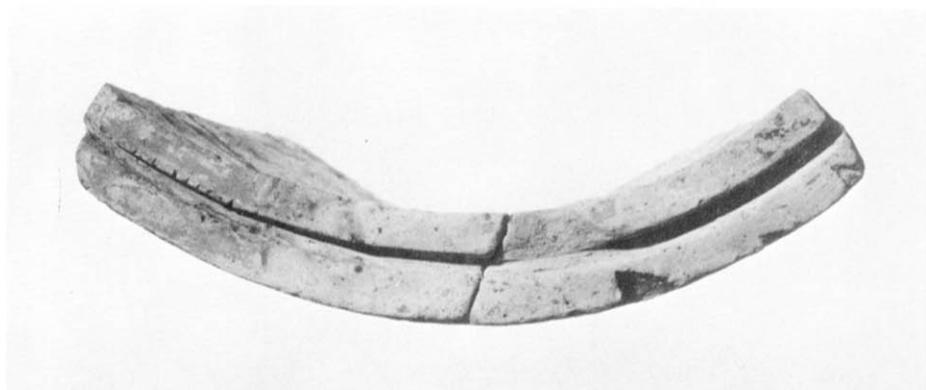


図版14 願光寺境内所在の礎石(南から)



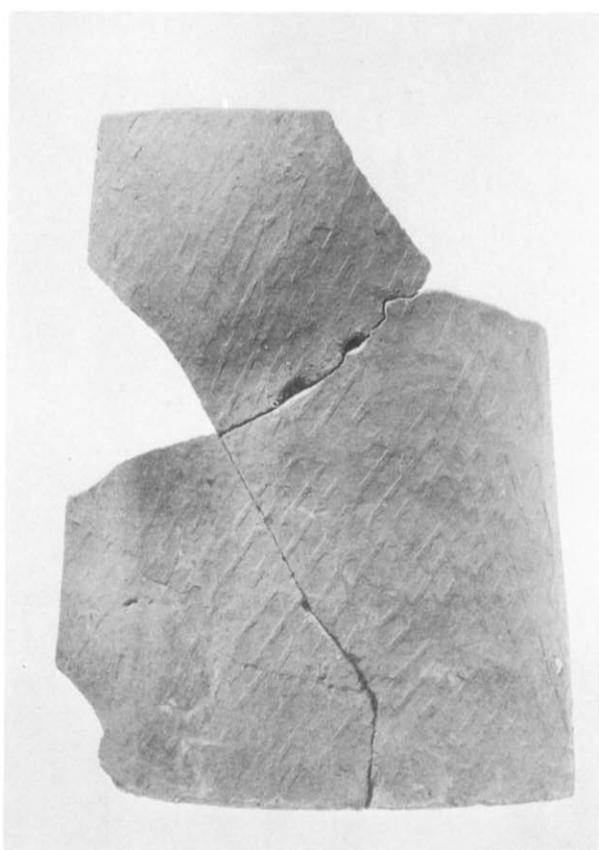
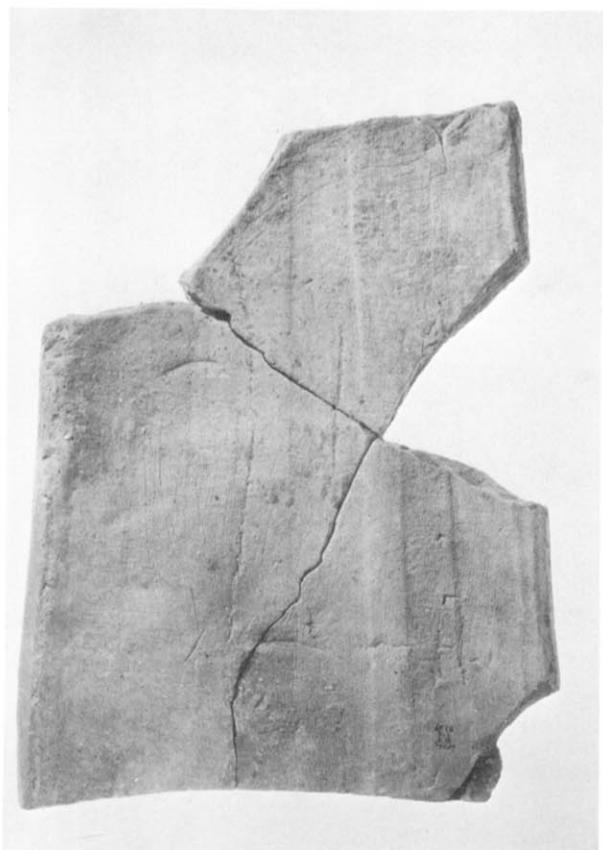
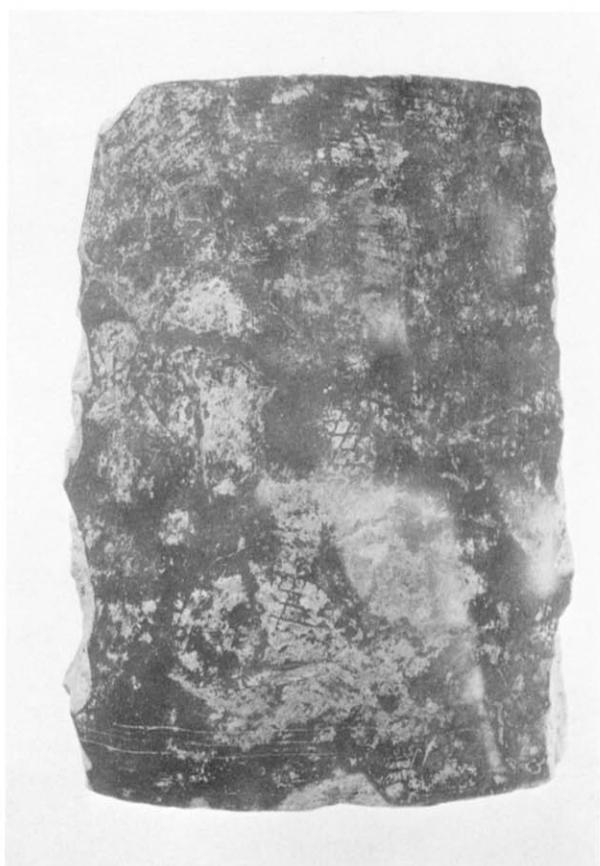
图版15 軒丸瓦

図版16
軒平瓦

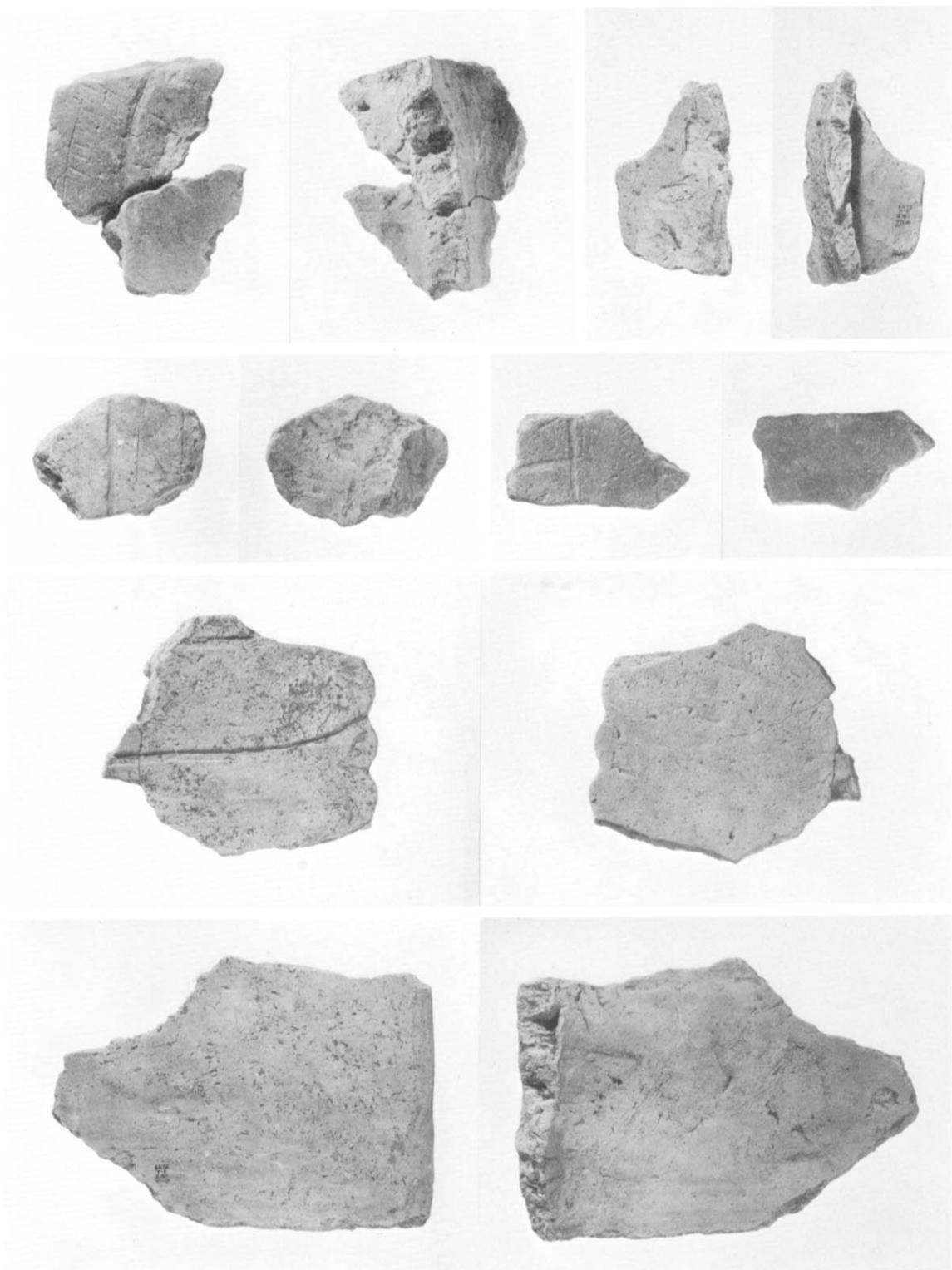




图版17 丸瓦·平瓦



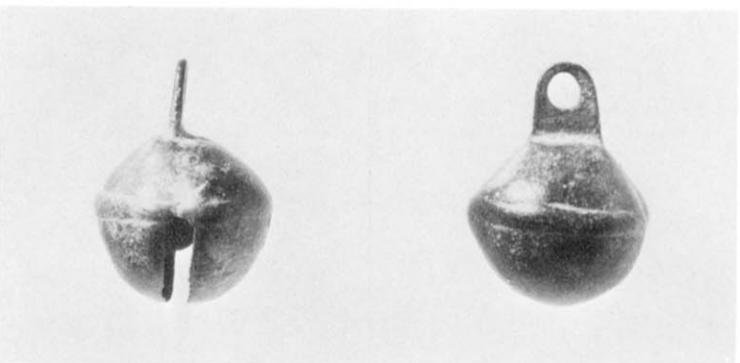
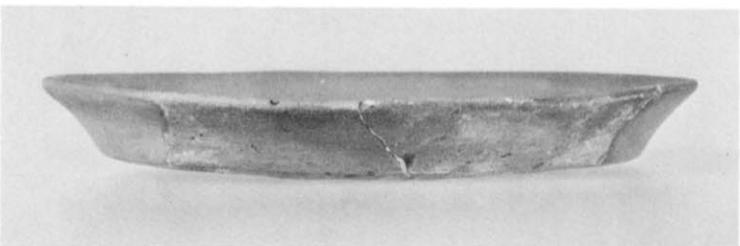
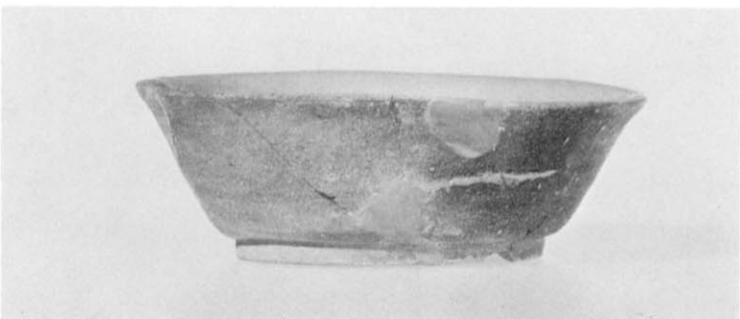
图版18 平瓦

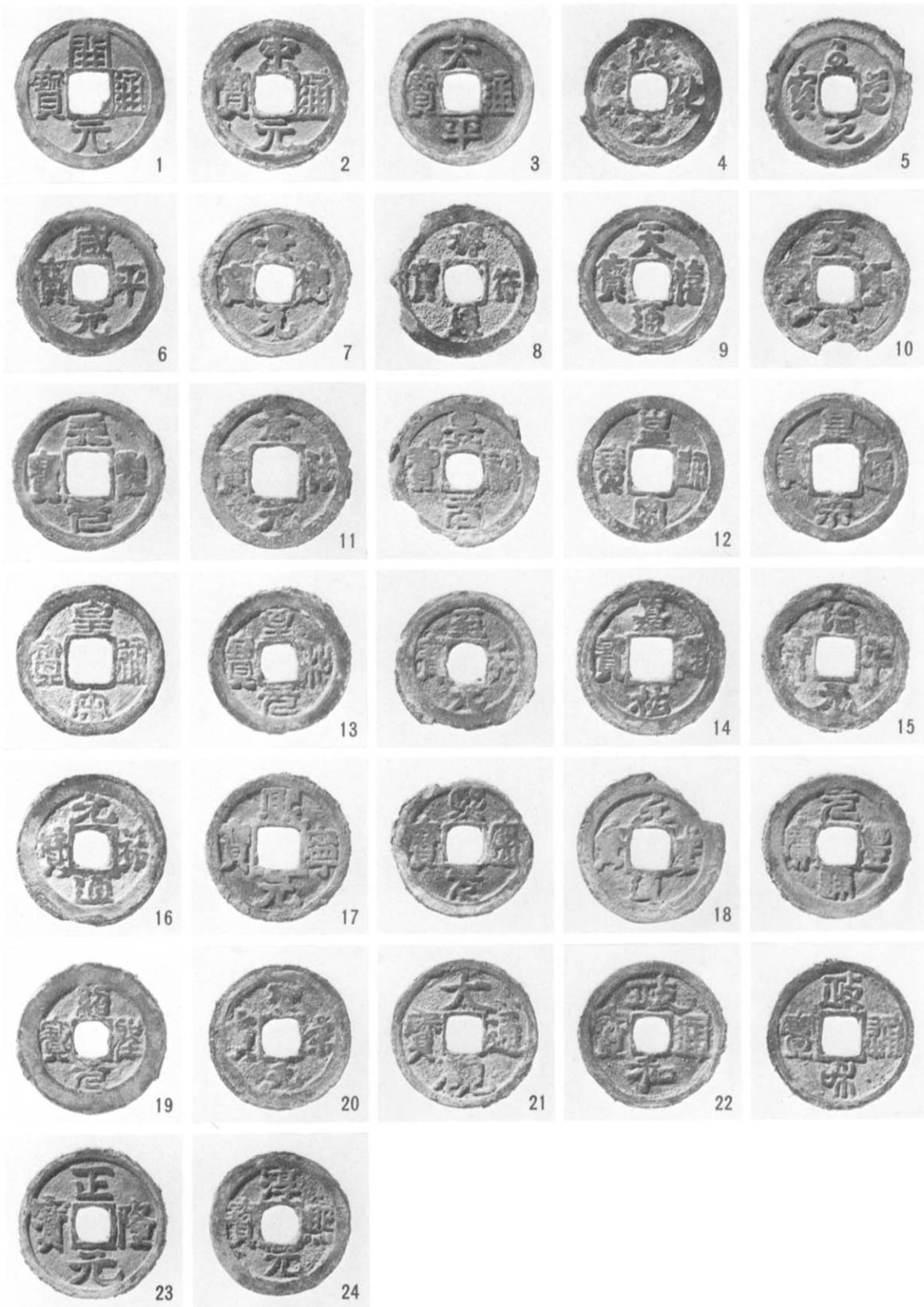


图版19 鴉尾瓦

図版20

出土土師器・須恵器
銅鈴





椿市 麿寺

行橋市文化財調査報告書第 集

昭和55年 3月31日

発行 行橋市教育委員会

行橋市大字大橋2296-1

印刷 株式会社 文信堂印刷所

行橋市神田町一丁目
